慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	キリシタン時代イエズス会の府内コレジオについて（下）
Sub Title	On the Jesuit college in Funai during the Kirisitan Era （part two)
Author	高瀬, 弘一郎(Takase, Koichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	2012
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.81, No.3 (2012. 7) ,p.1(355)- 48(402)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20120700-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

キリシタン時代イエズス会の府内コレジオについて（下）

高瀬　弘一郎

八

一五八三年一一月一二日付け日本発、ペドロ・ゴメスのイエズス会総長宛書簡に、豊後のコレジオについての記述が見える。その活動が少しずつ進展していく様子が分かる。次の通りである。

「私が駐在しているこの豊後国（レイノ）には、イエズス会が存在する地域（ルガレス）が三つある。すなわち、コレジオがある府内市、修練院（カサ・デ・プロバンシオン）がある臼杵地域（ルガル）、そしてパードレ一人とイルマン（エルマノ）一人、およびキリスト教会（クリスティアンダド）が存在する由布地域である。

コレジオには、イエズス会士一五人、すなわちパードレ三人とイルマン一二人が居住している。その〔イルマンの〕内二人が日本人であり、その他はヨーロッパ出身である。私が来着したので、教養科目（アルテス）〔すなわち哲学〕の課程（クルソ）が始まる予定である。巡察師パードレのこの指令を齎したからであり、またそれは準管区長パードレの指令でもあった。しかし、〔受講する〕者が五人しかいない。というのは、〔教養科目〕課程を聴講するためのラテン語が分かる日本人イルマンがいないからである。しかし、われらの主の御加護により、速やかに彼ら〔受講生〕が揃うことを願う。

五人全員が、〔教養科目〕課程が始まる前に霊操（エヘルシシオス）に入った。その後、聖ウルスラの祝日〔一〇月二一日〕に彼らの教師（マエストロ）が彼らにミサを挙行し、彼らに聖体（コムニオン）を授けた。最初は〔教養科目〕課程は、ヨーロッパにおいて講ぜられているように詳細に講ぜられるわけではないであろう。／（f. 179v.）しかし、神の恵みにより、パードレ・ト

レドが作った〔教養科目〕課程（クルソ）が要約（アブレヴィアンド）されるであろう。というのは、日本のためにはそれで充分だからである。とくに基礎段階である現在はそうである。

さらに四人のイルマンに、ラテン語が講ぜられている。そこにいる優れた能力を備えた若者たちである。彼らはすでに、日本語で上手に話をすることが出来る。彼らの内の何人かは、キリスト教徒たちに日本語で説教（プラティカス）をする。というのはわれわれは、ラテン語や〔教養科目〕課程（クルソ）を理解することよりも、〔日本の〕言語（レングワ）を理解することの方に、より深い心配りをしているからである。それ故、日本人イルマンたちでさえ、彼らの言語や文字（レトラス）の練習（エルシシオ）をする。それらに磨きをかけるためである。というのは、すべての人々と親しく交わらねばならない者にとって、それが必要だからである。われわれのイルマンたちがそうする〔親しく交わる〕ことを、われわれは望むからである。(1)」

右のゴメスの書簡によって、一五八三年一一月一二日当時のコレジオの活動状況として、次のことが分かる。

一、府内コレジオにはパードレ三人、イルマン一二人が居住していた。その内日本人イルマンは二人、他はヨーロッパ人であった。この人数は、先の一五八一年年報（一五八二年二月一五日、長崎）や『日本史』aにパードレ三人、イルマン一〇人と記されていたのに比べ、イルマンが二人増加している。増加した二人のイルマンは、ヨーロッパ人である。

一五八一年一二月二〇日日本に存在するイエズス会コレジオ・カザ、およびパードレ・イルマンの名簿（ロル）と題する史料は、小論（上）の註(117)に示したが、府内の聖パウロ・コレジオ在住者として、パードレ三人・厨房係イルマン一人・日本人説教者イルマン二人・ポルトガル人修学生イルマン五人が挙げられていた。日本人イルマンは養方パウロとミゲルの二人であったが、右のゴメス書簡に記されている日本人イルマン二人は、彼らではない。というのは、後に引用する一五八三年一一月一五日付けフィゲイレドの書簡に、二人の日本人イルマンはマティアスとリアンの二人である旨、記されているからである。

二、パードレ・ゴメスが齎した巡察師と準管区長の指示に基づき、教養科目すなわち哲学の授業が始まる運びとなった。巡察師はヴァリニャーノで、ゴメスが本書簡を記した時は日本を離れていた。(2) 準管区長はコエリョ（一五八一年～九〇年在任）(3)であった。

因みにこのゴメスであるが、一五五三年イエズス会入

会、一五五九年司祭叙階、一五八一年七月マカオ着、一五八三年七月二五日来日、直ちに豊後地区の上長（スペリオル）になった。[4] 教養科目すなわち哲学課程開講の指示についてであるが、ヴァリニャーノはインディアへ向かう途中、ゴメスは日本へ来る途中、マカオにおいて一時一緒になった。ゴメスはこの指令を、マカオにおいてヴァリニャーノから受けたのではないか。今一人の準管区長コエリョは、一五七二年来日、すぐに下地区の上長（スペリオル）になり、一五八一年半ばに日本布教長（スペリオル）になり、一五八一年末～八二年初に日本準管区長に就任、一五九〇年五月七日に加津佐で死亡するまでそれを務めた。[5] 一五八二年二月当時、準管区長コエリョは府内コレジオに居住していた。[6]

ゴメスは恐らくマカオで巡察師ヴァリニャーノの右の指令を受けて一五八三年来日、さらにその少し前から府内コレジオにいたコエリョも、同じく巡察師の指令に拠って同様の命令を与え、それに基づいて同コレジオで教養科目の講義が、五人の修学生を相手になされることになったわけである。受講者は五人のイルマンであって、この中には日本人は含まれていなかった。この五人のイルマンとは、小論（上）の註(117)に示した名簿史料に見える五人のポルトガル人修学生のことであろう。

当コレジオの授業は、一五八一年ラテン語と日本語の授業が行われ、ラテン語は古典学に進み、一五八二年には修辞学が予定されていたことはすでに見て来たが、これまでラテン語を学んできた修学生五人に対し、ここでいよいよ教養科目の授業がなされることになったわけである。

マカオ・コレジオの例であるが、コレジオの学習課程は、ラテン語・教養科目（すなわち哲学）・倫理神学・神学の順に学んだ。[7] これは、マカオ・コレジオに限るものではないであろう。いま府内のコレジオについても、修学生たちは第二の学習段階に入ることになった。

教養科目の教師についてであるが、一五八三年日本準管区パードレ・イルマンの名簿によると、居住施設別の名簿ではないので多少の紛らわしさもあるが、府内コレジオに次の三人のパードレが居住していたことは確実である。

パードレ・メルシオル・デ・フィゲイレド、府内コレジオの院長（レイトル）。

パードレ・クリストヴァン・モレイラ、府内コレジオに駐在、キリスト教会（クリスタンダデ）を巡回（ヴィジタ）。

パードレ・アントニノ・プレネスティノ、府内コレジ

オにおける課程（クルソ）の講師（レンテ）。[8]

右に見える課程（クルソ）の講師（レンテ）アントニノ・プレネスティノが、コレジオで教養科目すなわち哲学課程を講じる教師であろう。先に引用した一五八一年九月一五日付け臼杵発カブラルの書簡に、ラテン語の教師としてパードレ・アントニノ〔・プレネスティノ〕の名が見えた（小論（上）三四頁）。修学生たちに先ずラテン語を教え、ある程度その学力がついた所で、次の段階として教養科目を、同じパードレ・アントニノが講じたわけである。

右の史料に見える、アントニノ・プレネスティノについての「課程の講師」lente do curso の語に関して触れておく。「巡察師パードレ・アレサンドレ・ヴァリニャーノが〔一五〕九七年一〇月にこのマカオ・コレジオの授業のために与えた命令（オルデン）」と題する、マカオ・コレジオの教授指針のような史料に、各クラスの名称として「ラテン語のクラス」classes de latim・「教養科目の課程」curso das artes・「倫理神学」cazos da consciencia・「神学」theologia と記されている。同史料中、「課程」curso の語は「教養科目」の意味でのみ使用され、他の「ラテン語」「良心問題〔倫理神学〕」「神学」の意味でこの語が記されることはない。[9]

さらに、一五九八年二月一七日付け長崎発ペドロ・ゴメスが記した、一五九七年の日本年報の付録「マカオのコレジオとシナ国内に所在するレジデンシア」と題する史料には、「〔コレジオ居住の〕司祭の内六人は教師（メストレス）で、神学（テオロジア）一人・倫理神学（カゾス・ダ・コンシエンシア）二人・課程（クルソ）一人・ラテン語二人である。[10]」と見える。右の「課程」curso の語も、明らかに教養科目すなわち哲学の意味である。

三、教養科目すなわち哲学のテキストは、パードレ・トレド P.e Toledo が作った教養科目の書籍を要約して使用することを予定していた。日本（すなわち府内コレジオ）では未だ基礎段階であるから、それで充分だという。このトレドであるが、フランシスコ・デ・トレド Francisco de Toledo のことか。

フランシスコ・デ・トレド（一五三二年～九六年）はユダヤ人の血をひくスペイン人哲学者・神学者、一五三二年コルドバで生まれた。一五五四年～五八年サラマンカで、ドミニコ会士ドミンゴ・デ・ソトの許で神学を学び、また一五五七年～五八年哲学を教授した。司祭叙階を受け、一五五八年イエズス会に入会し、シマンカスで修練期を終えてローマに行き、コレジオ・ロマノで一五

五九年～六二年哲学を教授し、六二年～六九年神学を教えた。一五六九年ローマ教皇ピウス五世（一五六六～七二年在位）は彼を自分の説教者（プレディカドル）に任じた。続くグレゴリウス一三世（一五七二～八五年在位）・シクストゥス五世（一五八五～九〇年在位）・ウルバヌス七世（一五九〇年九月一五日～同年同月二七日在位）の許でも、彼は同じ役職を務めた。つまり彼は、当時最高の説教者の一人と見なされていた。その説教は、雄弁と率直さで有名であった。教皇グレゴリウス一三世・シクストゥス五世、とりわけクレメンス八世（一五九二～一六〇五年在位）の許で、彼は神学の面だけでなく、教会に関わる諸々の事柄について影響力を発揮した。クレメンス八世は彼を枢機卿に任じた。イエズス会士で枢機卿になったのは、トレドが初めてであった。また外交の方面でもいろいろ重要な役割を果たした。イエズス会総長アクワヴィヴァに対して、見解を異にすることもあった。彼は一六世紀におけるスコラ哲学の復興に貢献した。(11)

その著作は多数に上るが、大部分は哲学・神学・聖書解釈学に関するものである。『イエズス会歴史事典』や Enciclopedia Vniversal Ilvstrada にも彼の著作リストが載っているが、いま Sommervogel に拠ると、トレドの著作として一三点挙げる。一五八三年一一月一二日付け日本発の書簡に、トレドの哲学書を要約してテキストとして使用する予定であった旨記されているのであるから、トレドの著作の内該当するものはどれかを考える場合、考察の対象になり得るのはその出版年の点で一つの枠があるのは確かであるが、その枠内のものも何点かあり、いずれの著作か確定は困難である。(12)

さらに手掛かりを求めて、キリシタン時代にマカオに存在した書籍について見てみる。その時期のマカオ教会所蔵書籍目録が二つ知られているが、その一つ、マカオ・コレジオの蔵書目録（一六一六年）には、フランシスコ・デ・トレドの著作は見えない。(13) 今一点、「日本司教ドン・ディオゴ・ヴァレンテの死〔一六三三年一〇月二八日〕(14)に際して彼の書架にあった書籍の目録（一六三三年一一月一一日）」と題する蔵書目録があるが、そこには彼の著作が三点見える。同史料には書名が簡略に記されているが、それぞれ該当するのはどの書籍か、アンベルクロードが考証を試みている。その三点のトレドの著作は次の通りである。（アンベルクロードによる通し番号を付す。史料には番号は付されていない）。

（95） Tolet in Joannem.

(123)　Summa Toleti.

(131)　Tolet. in Ep. B. Pauli ad Rom.[15]

右の記載について、アンベルクロードはそれぞれ次の書籍であるとする。

(95)　Doctoris Francisci Toleti Cordubensis, e Societate Jesu, in sacrosanctum Joannis Evangelium Commentarii. Rome, 1588.

(123)　Francisci Toleti S. R. E. Cardinalis Summae de Instructione sacerdotis libri septem. Lyon, Horace Cardon, 1599, puis 1606.

(131)　Francisci Toleti, e Societate Jesu, S. R. E. Presbyteri Cardinalis commentarii et annotationes in Epistolam B. Pauli ad Romanos. Rome, 1602.[16]

トレドの右の三点の書籍は、それらの刊行年からも、またそれぞれの書籍のテーマからも、府内コレジオで要約してテキストとして使用したという著作ではあり得ないであろう。

わが国にキリスト教が伝来した初期の頃であるが、イエズス会パードレ・メルシオル・ヌネス・バレトが一五五六年日本に渡来した際、[17]かなりな冊数の書籍を齎した。それ以前に宣教師によって日本に齎された書籍は極く僅かで、一応纏まった数の欧文書籍がわが国に導入されたのは、これが初めてである。書籍を含め、この時ヌネス・バレトが齎した物品の目録が伝存している。「一五五四年にパードレ・メストレ・メルシオルが日本に携行した物品の一覧表」と題する史料である。表題は一五五四年に齎したように記してあるが、実際に彼が日本に渡来したのは一五五六年のようである。齎された物品を分類して列記してあり、書籍もリストになっている。[18]

それらの書名は簡略に記してあるが、ロペス・ガイ神父はかつて、それぞれ該当する書籍名を考証し、その解説を記述する論考を発表した。[19]同史料およびロペス・ガイ神父の論文に拠り、この時わが国に齎された書籍には、フランシスコ・デ・トレドの著作は含まれていない。彼の年譜やその著作の年代からも、それはありえない。以上要するに、府内コレジオで一五八三年に開講されることになった哲学のテキストとして、その要約を使用する予定とされたパードレ・トレドの著作とはどの書籍を指すのか、推定するのは困難である。

四、教養科目（すなわち哲学）の課程に進んだ五人のイルマン以外に、彼らに続いてさらに四人のイルマンが、ラテン語を学んでいたという。ゴメスが本書簡を認めた

当時、コレジオには一二人のイルマンが居住しており、その内日本人は二人であったという。したがって一〇人が外国人、その中には実務助修士（コアジュトル）が一人含まれたはずであるから、残る九人が学習を目的にコレジオにいる修学生であったことになる。九人の内五人が教養科目課程に進み、四人は未だラテン語学習中であったわけである。先に引用した一五八一年年報（一五八二年二月一五日付け）には、イルマンは日本人や実務助修士を含め全部で一〇人と見え、『日本諸事要録』（一五八二年二月二〇日現在）には、イルマン七～八人がラテン語から教養科目すなわち哲学に進む段階であったと記されている。それに対し、一年九ヵ月ほど経過した頃の現状を記述しているのであろうこのゴメスの書簡では、学習中の修学生イルマンの人数は九人に増えているが、教養科目受講の修学生の人数は五人に減少している。教養科目受講に進んでみたが、二～三人はまたラテン語のクラスに戻ったという意味であろうか、詳細は不明である。

ラテン語の教師名は記されていないが、おそらくはこれまで同様パードレ・アントニノ・プレネスティノが務めたのであろう。

五、二人の日本人イルマン、おそらく養方軒パウロとミゲルであろうが、彼らは外国人イルマンに対する日本語の教師であり、また説教者であったわけで、同じイルマンでも外国人修学生イルマンに伍して学習し、パードレを目指す立場ではなかった。外国人イルマンは、ラテン語や哲学の学習よりも日本語学力の上達に鋭意努力を注いだという。そのためにも日本人イルマンの二人は重要な役割を演じていたと言ってよい。

九

一五八三年一一月一五日付け日本発、メルシオル・デ・フィゲイレドのイエズス会総長宛書簡に次のように記されている（良い文章ではない、綴りが少し違っている、解読に難渋）。

「この日本について猊下に書き送るにあたり、これが私の役目であるので、この豊後国（レイノ）にあるこのコレジオについて猊下に報告することから始めようと思う。

コレジオの所在地とその建造物（ファブリカ）は、巡察師パードレ・アレサンデル・ヴァリニャーノが遺したのと同じである。わずかに、コレジオが道路（ルアー・コレンテ）に通じる主要な入口を備えるようにと、フランシスコ王（エルレイ）〔大友宗麟〕が与えた一本の道（カミニョ）が増えただけである。その道は、以前はそこに

小径（トラヴェサ）が通っていた。さらに王（エルレイ）は木材を援助した。そして〔同王は〕前述の道（カミニョ）に、木製の門を一つ作るのに力を藉すよう彼の一族（セウス・デ・スア・カザ）の者たちを説得した。それは日本では、その建物（エデフィシオ）・建造物（ファブリカ）全体の装飾のために、前部の庭（パティオ）の第一の入口に設置する慣習になっている。この門は作られた。

その〔門の〕工事以前から、そしてその後今に至るまで、同王（レイ）は、このコレジオの中に一つの教会（イグレジヤ）を建造したい、それ以外の建築工事をもしたいという強い希望を示している。それが今は、戦いに関する諸事情と窮乏のため不可能である。日本の国土は非常に貧しく、しかも彼〔王〕はすでにかなり以前に王国（レイノ）を異教徒（ジエンティオ）の息子[20]の手に委ねてしまったので（エントレゲ）、この彼の大なる望みを遂行するための力が彼に残っているなどということは、驚くべきことであろう。

彼は主として二つの理由から、この工事を成し遂げたいと望んでいる。一つは、日本全体の異教（ジエンティリコ）〔崇拝〕に抗する彼の敬虔さと神への崇敬・崇拝を表すためであり、第二は、このコレジオは小部屋（クビクロス）五つの空間しかなく、そこは未だほぼ新しいが、それ以外のすべての所は老朽化が進み、倒壊に瀕しているからである。そのためどうしてもここ二年間に、教会（イグレジヤ）についてもその他の所についても、全面的に新たに別の建築工事（オブラ）をして対応しなくてはならない。最も確かなことは、この工事において費やすものを、イエズス会が探し求めなければならないことである。それは猶予を許されない。それ故猊下はその対策を講じるよう、彼らに命じていただきたい。

私はこの件について、これ以上述べることはしない。というのは、そこ〔府内コレジオ〕で過ごし、すべてにわたってよく見届けた経験があり、如何にすれば〔同コレジオが〕存続し得るかを判断出来る巡察師パードレやその他の人々が、貴地[21]にはいるからである。

このコレジオには、二人の日本人イルマンがいる。すなわちマティアス[22]とリアン[23]である。二人とも京都（ミアコ）出身で、霊操（エゼルシティオ・スピリトゥアル）の修行をし、主日（ドミンゴス）と祝日（ディアス・サンクトス）とにコレジオにおいて、さらには村々（アルディアス）において説教をし、改宗した異教徒たちに教理教育をし、キリスト教徒たちと話し合い、彼らを教化することについて、適切（アレブアダメンテ）な教育を受けている。マティアスはその召命の内に心穏かに暮らしているが、リアンは、当地同様その地で敬虔な勤めをするという口実で郷里に戻ることによって、いくらか気持ちが不安定になるであろう。しかし、その誘惑は強いものではないので、若者の欲望の如く消えてなくなるか、

または常に変化しそして飢渇していることでもあるので、同じように突然の出来事で、彼が意図しない内に、彼がその望みを遂げることがあるかも知れない。

このコレジオにはさらに、修学生（エストゥダンテス）であるイルマン四人が居住している。彼らの内の二人は、一年と少し文法（グラマティカ）を受講している。彼らはマノエル・ボラリョ[24]およびジェロニモ・コレア[25]といい、適正な能力を有する。他の二人は、シマン・ゴンサルヴェス[26]およびアンドレ・ドリア[27]という。彼らは、ほとんど初心者（プリンシピアンテス）である。彼らの内の三人は、おおよそ二〇歳である。イルマン・ボラリョは、すでに三〇歳かそれ以上である。彼は学習するのと同時に、このコレジオ、臼杵の修練院（カザ・ダ・ノヴィシアリア）、由布の諸レジデンシア、津久見のレジデンシアの会計係（プロクラドル）を務めている。由布レジデンシアには、パードレ・ゴンサロ・レベロ[28]が居住し、津久見レジデンシアには、パードレ・ジョアン・バプティスタ[29]が居住している。それ〔津久見レジデンシア〕はこの度新たに、フランシスコ王（レイ）〔大友宗麟〕の要請によって整えられた。同王が居住しているあの村に、アルデア[30]パードレ一人とイルマン一人が共に滞在するのを、彼〔同王〕が望んでいるからである。

そこ〔同村〕はすでに、ほとんどすべてキリスト教徒であり、またそれを成し遂げつつある。パードレ・ジョアン・バプティスタは非常に愚かで、生来判断力に乏しい。もしもかかる場所において、同王の内的・外的の利益のため、さらにはわれわれのイエズス会自体の必要／(f. 182v.)、およびキリスト教会（クリスタンダデ）の利益のために、王（レイ）が勧告し交渉することによって、一人の賢明にして思慮深く、円熟したパードレの居住が可能であるなら、そしてそのことに同王が満足するなら、同王はそのすべてに対して、大なる支援を寄せるであろう。今は、大変な人手不足のために、パードレたちを補充しなければならないがそれに事欠いているので、これ以上のことは出来ないように思われる。

このコレジオにはさらに五人のイルマンがおり、おおよそ一ヵ月前から、論理学（ロジカ）の課程（クルソ）を始めた。すなわち、ミゲル・ソアレス[31]、ガスパル・マルティンス[32]、アマドル・デ・ゴイス[33]、ペ〔ド〕ロ・コエリョ[34]、ジョアン・ロドリゲス[35]である。

アマドル・デ・ゴイスは、大して能力を有しない。ペ〔ド〕ロ・コエリョは、今のところ理解が悪い。しかも、将来上達する見込みもないであろう。他の三人は、非常に優れた能力を備え、学問（シエンシア）に没頭する。

イルマン・〔ミゲル・〕ソアレスは、三〇歳以上であろう。他の四人は、おおよそ二五歳である。ソアレスは良識ある人物と期待出来る。〔修練院〕内部や対外的なあらゆる仕事や奉仕のために、彼は一年程前に修練院(ノヴィシアリア)において、パードレ・ペ〔ド〕ロ・レマン[36]を助けて修練者(ノヴィソス)たちを世話した。そのことで彼を助けていたイルマン・ガスパル・マルティンスが、そこから外れたからである。そういうわけで、〔ミゲル・ソアレス以外の〕他の四人は未だ若者の如き振舞である。われらの主の助けを得て、年月を経て成長するであろう。徳の面でも少しずつ成長するであろう。

現在このコレジオには、さらにイルマン・ジェラルディノ[37]がいる。彼は今年そちらから当地に、実務助修士(コアジュトル)のイルマンとして来た。現地の言語(リンゴア・ダ・テラ)〔日本語〕を理解しない。それについて極めて初心者である。

論理学(ロジカ)の教師(メストレ)は、パードレ・アントニノ〔・プレネスティノ〕である。それにあまり造詣(デストロ)深くない。他の人々〔パードレたち〕はそれをうまく教えることが出来るであろうが、それをうまく出来るであろう別の〔パードレ〕をその任から外すよう配慮がなされている。〔そのパードレが〕キリスト教会(クリスタンダデ)への奉仕に携わるためである。

パードレ・アントニノは、キリスト教会の仕事を手伝うことが出来るためには現地の言語〔日本語〕を修得しなければならないが、それが好きではなかった。そのため、彼ら〔イエズス会〕が彼に与えた仕事が講義(レル)をすることである。またそれは、彼を心穏やかにさせるためでもある。というのは、日本での生活のために彼の気持ちが不安定になるからである。現在、半分まで講義をする[38]この仕事によって、彼は比較的心穏やかになった。論理学(ロジカ)が要綱風に要約して講ぜられているが[39]、しかし彼が、それ〔論理学〕を最後まで講じることが出来るだけの力量を有するかどうか疑わしい。

現在われわれはこのコレジオに、パードレ・ラグナ[40]を借りてきている。キリスト教会(クリスタンダデ)の世話をし、巡察し、告解を聴くために別のパードレを補充してもらうまでのことである。それ〔同キリスト教会〕は端から端までおおよそ一三レグワで、そこに当コレジオが世話をするキリスト教徒が暮らしている。

上記の記述から猊下は次のことを知るであろう。すなわち、このわれわれのコレジオは、学習(エストゥダンテス)や、修学生(オフィシアイス)たちを養育する仕事のほとんどすべてに携わっているので、そのために、そこ〔同コレジオ〕に少なくとも実務担当者

二人、すなわち副院長（ミニストロ）と厨房係（ソトミニストロ）がいる必要がある。というのは、いまは副院長がいないからである。

上に名を挙げた修学生であるイルマン・マノエル・ボラリョは、その他のすべてのカザに補給をする会計係（プロクラドル）の仕事をも務めている。同時にそれと共に、厨房係をも務めている。このすべてのことを彼は、コレジオにおいて対応しなければならない事柄や、同コレジオが教会（クリスタンダデ）の高位聖職者（ベルラド）・主任司祭（クラ）・働き手（オブレイロス）として奉仕するそのキリスト教会（クリスタンダデ）を建て、そして務めを果たす当地域において対応しなければならない事柄を犠牲にしないでは、なし得ない。[41]」

右の書簡を記したメルシオル・デ・フィゲイレドは府内コレジオ院長として、すでに登場した。この人物について、一五七九年一二月在日パードレ・イルマンの名簿に、次のように見える。「パードレ・ベルシオル・デ・フィゲイレド、ポルトガル人、インディア生まれ、五〇歳、イエズス会歴二〇年以上、陰鬱で体調不良、約一五年在日、〔日本の〕言語が非常によく分かる、府内にいる。[42]」

ここに府内コレジオ院長と記されていないのは、未だ創設されていなかったからである。

フロイス著『日本史』には、「この〔府内〕コレジオの院長（レイトル）には、イエズス会士としても、また日本でも経歴の非常に古いパードレ・ベルシオル・デ・フィゲイレドが就任した。[43]」と記されている。つまりフィゲイレドが、コレジオの初代院長に就任したことが分かる。

一五八一年一二月二〇日在日イエズス会パードレ・イルマンの名簿には、府内の聖パウロ・コレジオの院長（レイトル）として、パードレ・ベルシオル・デ・フィゲイレドの名がみえる。[44]

一五八二年二月における在日イエズス会パードレ・イルマンの名簿には、パードレ・メルシオル・デ・フィゲイレドについて、「哲学課程の後、二年間神学を受講、二年間文法を教授、ゴア修練者の教師、院長、一五八二年三盛式誓願司祭[45]」と記されている。

一五八三年日本管区イエズス会パードレ・イルマンの名簿に、パードレ・メルシオル・デ・フィゲイレドについて、府内コレジオ院長と記されている。[46]

しかし、一五八七年一二月イエズス会東インディア管区パードレ・イルマンの名簿には、マカオ・カザの居住者の中にメルシオル・デ・フィゲイレドの名が見え、

「日本の来訪者」[47]と記されている。つまりその時期には、フィゲイレドはマカオにいたわけであるが、彼のマカオ渡航について少し記す。

一五八七年一〇月二日付け平戸発、ルイス・フロイス記述のイエズス会一五八七年度年報に、次のように記述されている。

「昨年のジャンク船が発った後に形成された布教団は、次の通りである。豊後から、パードレ・メルシオル・デ・フィゲイレドが下関に来た。イエズス会士として、そしてインディアのモルッカと日本での経歴が非常に古い人物である。そこ〔日本〕に二三年間滞在した。立派な活躍をしたが、老齢に達し、結石と痛風の病が極めて重篤で、もうすでに、腕で支えてもらわなければ場所を移動することが出来ない有様であった。日本〔の懸案〕が解決し始めたその端緒であり、また当地では彼に対して必要な薬を処方する便宜がなく、彼がしきりにそれを望み、求めたので、準管区長パードレが彼を、同じ〔昨年の〕ジャンク船でシナに送った。マカオにおいて、よりよい治療が可能であったからである。」[48]

つまり、府内コレジオ院長を務めたフィゲイレドは、病気治療のため一五八六年に日本を発ったジャンク船でマカオに行ったという。シュッテ神父は右の年報に拠り、この年一〇月に平戸からマカオに渡航したジャンク船を利用して、彼がマカオに渡航したと記す。[49]

フィゲイレドが病気治療のためにマカオに行った後のコレジオ院長については、右に引用した一五八七年一二月の名簿（註(47)）に、パードレ・フランシスコ・カルデロンについて、「〔府内コレジオ〕院長兼神学の講師」[50]と記されており、カルデロンがフィゲイレドの後を継いでコレジオ院長に就任したことが分かる。

さて右に引用した、府内コレジオ院長フィゲイレドの一五八三年一一月一五日付書簡によって、次の事実が判明する。

一、府内コレジオの全容は、基本的にヴァリニャーノが遺したのと同じであって、僅かに大友宗麟の援助により、門が作られた外、些細な拡張があるのみである。

二、コレジオは、五つ小部屋は新しいがそれ以外は老朽化している。二年以内に教会やその他について、全面的に建築工事をしなければならない。その費用はイエズス会が調達しなければならない。小部屋が五つあったという点は、ヴァリニャーノ『日本諸事要録』の記

述と同じである。

三、現在コレジオには、二人の日本人イルマンがいた。マティアスとリアンである。説教者として活動していた。一五八一年九月一五日付け臼杵発カブラルの書簡では、日本人イルマンが二人いることは同じであるが、二人とも修学生で、その一人は養方軒パウロであった。一五八一年一二月二〇日在日パードレ・イルマンの名簿には、府内コレジオ在住日本人イルマンは養方軒パウロとミゲルの二人で、二人とも説教者であり、修学生ではなかった。これらの史料が正確な記録であるなら、一五八一年九月一五日当時は二人の日本人イルマンは修学生であったが、同年一二月二〇日当時は修学生を外され、説教者の役割のみとなったわけである。フィゲイレドの本書簡では、二人の日本人イルマンが説教者であったことは変りないが、二人の顔触れが替った。

四、修学生であるイルマンが九人いた。その内、ラテン語学習段階の者は四人で、マノエル・ボラリョ、ジェロニモ・コレア、シマン・ゴンサルヴェス、アンドレ・ドリアであった。前の二人はすでに一年と少しラテン語文法を受講し、後の二人は未だ初心者であった。

他の五人は、一五八三年一〇月半ばから論理学の課程を受講し始めた次の五人であった。ミゲル・ソアレス、ガスパル・マルティンス、アマドル・デ・ゴイス、ペ〔ド〕ロ・コエリョ、ジョアン・ロドリゲス。

論理学課程と記されているが、教養科目（哲学）課程のことであろう。一五八一年年報（一五八二年二月一五日付け）には、ラテン語修得者に今年から修辞学（古典学）の講義がなされる予定と見え、ヴァリニャーノ著『日本諸事要録』（一五八三年一〇月二八日、コチン）には、古典学を終えて、教養科目（哲学）を受講しているイルマンがいたと記す。一五八三年一一月一二日付けゴメスの書簡には、五人の修学生に対して教養科目の講義がなされる運びとなった旨、記されている。

五人に哲学が講ぜられている旨のフィゲイレドの本書簡の記述は、右の『日本諸事要録』やゴメスの書簡の記載と符合する。

五、コレジオにはさらに、今年来日した実務助修士のイルマン・ジェラルディノがいた。

六、論理学すなわち哲学の教師は、パードレ・アントニノ・プレネスティノであった。彼はそれにさほど造詣

が深いわけではないが、日本語が出来ず布教・司牧の面での活動が思うに任せないので、代りに論理学を講義する仕事が与えられたものである。彼の講義は、論理学を要綱風に要約して講じるものであり、最後まできちんと講義をすることが出来るか、危惧されていたようである。

七、コレジオが世話をしているキリスト教会（信徒）に対する司牧活動のためのパードレに不足し、人員の補充をしてもらうまで、パードレ・ラグナを借りて働いてもらっている。

八、コレジオが滞りなく活動していくには、副院長と厨房係とを必要とする。厨房係は、修学生のイルマン・マノエル・ボラリョが務めているが、副院長を欠いている。

一五八四年一月二日付け長崎発、フロイスが記述した一五八三年度年報に、次のように見える。

「府内のコレジオに関してであるが、すでに当初われわれが述べた如く、そこには司祭（サセルドテス）二人と院長（レイトル）パードレが駐在している。そして其処では、現在教養科目（アルテス）の最初の課程（プリメイロ・クルソ）の講義が始まった。それはこれまで日本で、五～六人のイルマンに対して講ぜられた。その他〔のイルマンたち〕は、古典学（ウマニダデ）を学習している。行動様式において彼らが有する秩序は、イエズス会の規則（レグラス）および会憲（コンスティトゥイソンエス）に則したものである。」(51)

一五八三年度年報には、「府内コレジオについて」Do collegio de Funay と題する節があり四頁程記述されているが、その大部分は同コレジオが担当する地域のキリスト教会に関する内容で、肝心のコレジオの学事については右の記事だけである。この年報はエヴォラ版カルタス第二部に収載されているが、そこでは右の学事関係の記載がすべて削除されており、同学事については僅かに「府内のコレジオでは本年、哲学（フィロソフィア）の講義が始まったが、これは日本では新規なことである。」(52)との記述が見えるのみである。原文書には「教養科目」artes と記されているのに対し、エヴォラ版は「哲学」Filosofiia と記す。

つまり右の年報により、一五八四年一月二日現在、五～六人のイルマン（修学生）に対して初めて哲学の最初の課程、つまり入門という意味であろうが、講義が始められた。他のイルマン（修学生）は古典学の学習、つまりラテン語文法を終えて、後期の段階に入っていたという。

先の、府内コレジオ院長フィゲイレドの一五八三年一一月一五日付書簡の記載内容と対比すると、ラテン語学習中のイルマンの、学習段階の説明に微細な違いがあるが、その他基本的に同じ内容が記されていると言ってよい。

一五八四年一月六日付けマカオ発、パードレ・ロレンソ・メシアのコインブラ・コレジオ院長（レイトル）パードレ・ミゲル・デ・ソウザ宛書簡には、次のように記述されている。

「パードレ〔巡察師ヴァリニャーノ〕は右の〔有馬セミナリオ・安土セミナリオ・臼杵修練院の〕ほかにさらに、課程（クルソ）〔哲学〕と神学（テオロジア）を講義するコレジオを豊後に創設したが、日本に在るポルトガル人イルマンの大部分は、同所に居る。[53]」

一五八四年一二月一三日付け加津佐発、フロイスのイエズス会総長宛書簡に、次のように見える。

「何らかの災難や摂理（プロヴィザン・ディヴィナ）により、これ〔イエズス会士たちが高槻のセミナリオから、臼杵の修練院（カザ・ダ・プロヴァザン）に入るためにやってくること〕が行われないような場合は、〔府内〕コレジオや〔臼杵〕修練院（カザ・ダ・プロヴァザン）を、肥前国（レイノ）や下（シモ）の地域に移さなければならないであろう。其処ではそれらは、多くの理由から、比較にならないほどそれに適した便利さを享受出来るであろう。というのは豊後にそれらが存在するのは、その他の点では利点があっても（それ〔豊後にあることの利点〕については、巡察師パードレから猊下に報じられたことであろう）、外に極めて難儀かつ厄介な面があり、その利点を減じてしまう。

第一に、ナウ船が渡来する所から豊後までは陸路約八〇レグワあり、毎年、衣類・祭服（オルナメント）と祭壇用具（ミサ）・ミサの葡萄酒・オリーブ油等の補給物資、そして挙句の果てカザが必要とするあらゆる品物すべてを、これ程長い道のりを豊後まで運ぶわけで、その運送料はその品物の価値の何倍もの額になり、そのような次第で、経費はほとんど二倍になる。

第二に、この荷物の運搬は、二五～三〇レグワ海上を行くため海賊に奪われる危険や、あるいは陸路を行く五日間の道中に、盗賊に奪われる危険が極めて大である。

第三に、その道中は非常に険しく、岩場多く、高い山を越え、岩石の地や非常に大きな川があり、／(f. 331) 荷物はすべて駄馬で運ばれる。そのためその荷物は重量のため運搬出来ず、イエズス会が何も受け取らない年もある。ポルトガルから齎されるミサの葡萄酒が、壊れるか

こぼれるかして失われることもある。駄馬が川を行き、荷が濡れてしまうこともあれば、道中邪魔をされないために土地の異教徒（ジェンティオス）領主（セニョレス）に与えなければならない賄賂を別にして、それ以外の品物を盗まれることもある。

第四の危険と難儀は、しばしば他のすべてよりも大きな苦悩を与えるものである。というのは、日本では絶えることなく頻繁に戦いがあり、この陸路が二、三年妨害されて、この補給物資をその道路経由では全く送ることが出来ず、そのため二〇〇レグワ以上の海路を迂回航海しなければならない事態が生じるからである。通常この海域で略奪を働く盗賊のため、それは艦隊（アルマダス）の危険に劣らない。

コレジオや修練院（カザ・ダ・プロヴァザン）が当地（パショ）下に存在するのは、次のような利点がある。

第一、全域がキリスト教徒たちの地域であって、異教徒（ジェンティオス）を恐れる必要がない。

第二、毎年補給物資を当地に齎すシナからのナウ船〔入港地〕の近くである。

第三、道中の経費や、陸路や海路の盗賊の危険がない。

第四、当地は補給物資が比較的安価であり、調達は比較的容易である。[54]」

コレジオが豊後府内に創建されて未だ間もないこの時点ですでに、修練院ともども下地域に移した方がよいという声が、在日イエズス会の中に起こっていたことは興味深い。一五八四年当時、日本にはセミナリオは高槻と有馬に存在した。[55] 右の書簡でフロイスは、高槻セミナリオを終えた者たちが府内コレジオに入ることがなくなったら、コレジオの下地域移転が必要になる、と主張する。しかし、以下彼が記述するコレジオが府内に存在することの不利と下地域にあることの利点は、高槻セミナリオとの絡みで論じる内容にはなっていない。恐らくフロイスの本音は、高槻セミナリオとの連絡には関わりなく、コレジオを下（シモ）の何処かに移したいと思っていたのであろう。

長崎からの物資運搬の不便がそれ程大きな障害になるという話は、日本国内広範に布教活動を展開しようということと相矛盾する。ここで言われているのは、あくまでコレジオ・修練院といったイエズス会の中核機関――そこには相当の人数が居住する――は下の、もっと諸条件に叶う土地に設置するのがよいという話であろう。耳川の戦に敗れて以後の大友領に、コレジオの如き機関を置くことの意義が薄れていたことが、背景にあったと言

うべきであろう。しかしそれは一五八〇年に開設した時にすでに分かっていたことである。府内に設置することに決したヴァリニャーノの判断が妥当であったかという疑問は、フロイス初め在日イエズス会士が抱いたことであろう。

先に引用した一五八三年一一月一五日付けメルシオル・デ・フィゲイレドの書簡に、府内コレジオにおいて、論理学はアントニノ・プレネスティノが講義した旨記されていた。そのアントニノが、一五八四年一二月二〇日付け豊後発イエズス会総長宛書簡において、同コレジオに関して次のように記している。（本書簡は文書の左端部分の状態が不良で、判読困難である。そのような箇所については、前後の文章から推測して解読を試みたことを断っておく。）

「猊下がご存じの如く、パードレ・アレサンドレ・ヴァリニャーノは日本巡察の時に、二つのセミナリオを始めた。そこにおいて、現地の子供たちが徳とわれわれの学文を学ぶためであり、またイエズス会の仲間になるためであった。このことは、彼らにとって洵に的確かつ必要な措置である。さらに彼は次のことを命じた。ラテンの学文のためには彼らには、異教徒の古代の著者たちではなく、キリスト教徒著者のいくつかの著作を講じるように、と。というのは、彼らは幼いうぶな国民であるので、偶像に対して好意を抱いているからである。そして古典学および修辞学の学習の後、そのために作られた哲学および神学の要綱を講じること。繊細で好奇心があり、新奇を好む国民に、多様な見解様々な教理により誤謬の機会を与えないようにするためである。同じ要綱を、われわれ〔イエズス会士〕仲間にも講じること。というのは、当地では会員たちの人数が不足している一方で、重要にして緊急な仕事があるため、ヨーロッパにおいては彼らに与えられる学習の時間が、われわれの仲間に与えることが出来ないからである。このような秩序立った生活環境は、パードレ全員に共通のように思われるが、われわれはこれを実行することが出来ない。

哲学と神学の要綱に関しては、パードレ・ペ〔ド〕ロ・ゴメスの渡来によって、古典学についての私の生徒である何人かのイルマンたちに、学業が与えられた。二語判読困難皆が集まることが出来るようにするためである。

セミナリオにおいて、一人のパードレがイルマン二人

に対し課程の要綱を講じた。巧みに要約したJavelloの[56]要綱である。また修練院において他の一人に対し、テイテルマノTitelmanoの要綱に拠る要綱が講じられている。[57]

ここコレジオにおいては、現在は私が五人に対し、幾つかの著作に拠って作られた要綱を講じている。われわれは良い物を作るための、確かな物も時間も便宜も持たないので、教師たちも生徒たちも余り満足することなしに、講義がなされている。

大変学識あり、明らかにすばらしい才能の持主であるパードレ・ペ〔ド〕ロ・ゴメスは、神学の何らかの論題の要綱を作り始めた。しかし、仕事やその他の支障が彼に生じて妨げられたために、その進行は遅く、あまり好んで行っているわけでもない。というのは、次のようなことが彼に分かったからである。すなわち、〔皆から〕求められているようなものは、作れないということ。そして後になって彼も満足がいかず、また神は、先々どうなるかご存じであるということを。[58]

当地でわれわれが抱える難儀が猊下に分かるには、次のことを知れば充分である。すなわち、キリスト教会が如何に大きく、しかもわれわれが僅かしかいないこと、

それでいてわれわれは多くのことを行う義務があるということ。このようなことは御地では、多数の修道士・司祭・司教、およびその他の役職の者たちが行うであろう。したがって、これらの極めて重要な仕事と、その一方で諸事に忙殺される有様については、記述しきれない。パードレたちの中で最も暇で、彼らがそれを望んでいるパードレが私だということを。／(f. 336v.) 私は、毎日二時間課程を講じる。他の二時間は二つの授業、すなわち古典学の時間と文法の時間である。また私の側で死亡した死者を埋葬する。時にキリスト教会を訪ねる。時々私は、一五回か二〇回カザの外に出る。そして、私が講義をしないことが頻繁にある。というのは、私は、私の生徒たちと共に、この務めに忙殺されているからである。[59]」

アントニノの書簡の内、とくに生徒への授業に関する記述を右に引用した。セミナリオ関係の記事も関連するので訳出しておいた。ここではコレジオに関わる記載内容のみに着目するが、本書簡によって次のことが明らかになる。

一、ゴメスの渡来によって、アントニノ・プレネスティノが古典学つまりラテン語を教授した修学生五人に、

次の段階の学習が課せられる運びとなったという。この点は、すでに先に引用した一五八三年一一月一二日付けペドロ・ゴメスの書簡（註(1)）に、巡察師ヴァリニャーノおよび準管区長コエリョの指示に基づき、教養科目すなわち哲学の授業を五人のイルマンに行うことになった旨記されていたのと符合する。

二、コレジオでの哲学の教師は本書簡の差出人、すなわちプレネスティノである。本書簡に、哲学・神学のテキストとしてJavelloやTitelmanoのものを使用すると記されているのは、セミナリオや修練院でのことである。コレジオについては書名・著者名は見えず、幾つかの著作に拠る要綱と記されているに過ぎない。しかもそのテキストの出来栄えについては、教師も修学生も不満があったという。

一五八三年一一月一二日付けゴメスの書簡には、パードレ・トレドの著書の要綱を使用する予定であったと記されていた。哲学の教師をプレネスティノと記していた点は同じである。

三、ゴメスが、神学の或る論題の要綱を作り始めていた。しかし様々な支障があって進行は遅々としており、しかも望み通りのものが出来上がる見込みもなかったという。

四、プレネスティノはコレジオで、毎日二時間哲学を講じたという。コレジオの授業としては、その他に古典学（すなわちラテン語上級）一時間、文法（すなわちラテン語初級）一時間の授業が行われた。

一五八五年八月二〇日付け長崎発、フロイスが記述した一五八五年度イエズス会年報には、次のように記述されている。

「イエズス会士で現在豊後国（レイノ）にいる者は全部で三五人であって、府内のコレジオ、臼杵の修練院（カザ・デ・プロヴァサン）、および二つのレジデンシアにおり、その内八人は司祭（サセルドテス）、一四人は日本人イルマン、一三人はヨーロッパ人〔イルマン〕である。この内六人は修練者（ノヴィシス）、八人は修学生（エストゥダンテス）、五人は日本人である。〔中略〕

学習（エストゥディス）に関しては、昨〔一五〕八四年に日本において講じられた最初（プリメイロ・クルソ）の課程が終了した。本年〔一五〕八五年の初めに、パードレ・ペドロ・ゴメスが彼らに対して直ぐに、神学（テオロジア）の講義を始めようとした。しかし豊後においては改宗の仕事に多くの、そして例を見ないほどの人員の必要が生じ、今年はこれまでのあらゆる年より豊かな

実りを収めているので、かかる好機を逸しないよう、とくに四旬節(クワレスマ)の間は他の働き手が不足するので、学習を中断しなければならなかった。〔中略〕

復活祭(パスコア)が過ぎて、もう充分それに対応出来るだけの余裕が出来たので、パードレ・ペドロ・ゴメスは神学(テオロジア)の一つの講義(リサン)を講じ始めた。パードレ・アントニノが秘跡(サクラメンティス)に関するもう一つ〔の講義を始めた〕。修練(プロヴァサン)の期間を終え、誓願(ヴォトス)を立てた四～五人の日本人イルマンが、臼杵の修練院(カザ・デ・プロヴァサン)から府内のコレジオに行き、其処でラテン語を学び始めた。この国民の優れた判断力と豊かな才能により、彼らはそれ〔ラテン語学習〕に非常に上達し、われわれ仲間のヨーロッパ人のパードレたちやイルマンたちを、驚嘆させたほどである。[60]」

右の史料により、次の事実が判明する。

一、一五八四年に府内コレジオで初めて講じられた哲学の授業が終了した。すなわち、先に一五八三年一一月一五日付けフィゲイレドの書簡により、一五八三年一〇月半ばに五人の修学生に対し論理学（哲学）の講義が始められたことが分かっていたが、翌八四年末にはそれが終了したわけである。

二、その翌一五八五年には、同じ修学生たちに直ぐ続いて神学の講義を始めるべきところ、四旬節（復活祭前の〔主日を除く〕四〇日間）は教会活動が多忙を極めたので、その間は学習を中断し、その後に二つの神学の授業が始められた。一つはゴメスが担当の神学の授業、今一つはアントニノ・プレネスティノが講じた授業で、秘跡についての講義であった。

三、修練期を終え誓願を立てた日本人イルマン四～五人が、臼杵修練院からコレジオに来て、ラテン語の授業を聴講し、目覚ましい上達を見せた。

因みに一五八二年二月現在、臼杵修練院には次の七人の日本人がいた。

Joannes Torres	四〇歳	一五六八年入会	説教者(コンチオナトル)[61]
Linus	二六歳	一五八一年入会	説教者
Gianus	二五歳	一五八一年入会	説教者
Ignatius	二五歳	一五八一年入会	説教者
Melchior	二三歳	一五八一年入会	説教者
Georgius	二一歳	一五八三年入会	説教者
Andreas	一九歳	一五八三年入会	説教者[62]

一五八三年末現在の日本管区のパードレ・イルマンの名簿に拠ると、当時日本人イルマンは全部で二六人いた。

その内修練者 novicios として名前が記されているのは、次の一〇人である。

Niculao Afonso Gomes Jião Ynácio Bastião Simão Gaspar André Thomé[63]（この一〇人の内、右の一五八二年二月に臼杵修練院にいた者は、Ynácio と André の二人だけか）

本書簡が記す、臼杵修練院から府内コレジオに日本人イルマンが来てラテン語を学んだというのが一五八四年頃だとするなら、厳密にその頃臼杵修練院にいた日本人修練者の人数と名前は不詳であるが、一五八三年末に修練者であった右の一〇人の内の四～五人であった公算が大である。

一五八五年一〇月三〇日付け府内発、ペ〔ド〕ロ・ゴメスのイエズス会総長宛書簡は、府内コレジオでの学習に言及しているが、それは次の短い文章である。

「ラテン語〔の授業〕と神学（テオロジア）〔の授業〕が講じられているこのコレジオの授業（リシオネス）は、現在中断した。それはわれわれが、叛乱（レヴェルタ）のさなかにいるからである。[64]」

コレジオでは神学とラテン語の授業が行われたが、ゴメスが本書簡を記述した当時は、豊後国内で叛乱が勃発したためその授業が中断されていたという。授業が神学とラテン語の二つであったという点は、先の一五八五年八月二〇日付け一五八五年度イエズス会年報の記述と符合する。

叛乱とは何を指すのか。先に記した通り、耳川の戦で大友勢が大敗を喫したのは天正六年一一月一二日（一五七八年一二月一〇日）である。その後これまで大友に服していた領国内外の領主が次々と叛いて、島津義久や佐賀の竜造寺隆信に応じた。大友・島津・竜造寺による鼎立抗争の時期に入ったが、竜造寺隆信は天正一二年三月二四日（一五八四年五月四日）、島原半島における島津家久（島津義久弟）・有馬鎮貴（晴信）連合軍との戦に敗れて戦死した。ここに大友氏は、島津氏と正面から相対峙することになるが、独力では島津に対抗すべくもない大友宗麟が、大坂城で関白秀吉に謁見して支援を求めたのは、天正一四年四月五日（一五八六年五月二三日）であった。[65]

ゴメスが右の書簡を記述した頃の大友氏を取り巻く状況はおおよそ右の通りであって、領国の勢いは衰退の一途を辿っていた。関連の教会史料の記述を見てみると、一五八五年一一月一三日付け長崎発、フロイスのイエズ

ス会総長宛書簡（一五八五年度年報補遺）[66]、および一五八五年一〇月一日付け長崎発、フロイスの一五八五年度年報補遺[67]、等の当該時期のイエズス会年報あるいは年報の一部をなす史料には、この頃の豊後その他大友領内の乱れ、戦乱等について触れているが、それが原因でコレジオの授業が中断を余儀なくされたといった記述は見えない。

一五八七年一二月ゴアで作成されたイエズス会東インディア管区のパードレ・イルマンの名簿（日本に関しては一五八六年九月～一〇月現在の状況）に拠ると、その当時の府内コレジオの居住者は次の通りであった。全員の名前・役職・学習段階等は、小論一一章の纏めに記す。

パードレ　四人
イルマン　一六人　その内日本人二人、実務助修士一人。[68]

右の名簿の記載についてであるが、「文法学習中」と記されている者の中には、次に示す一五八六年一一月末記述の年報に拠り、古典学受講中の者も多数含まれたはずである。（一一章の「府内コレジオの居住者」の七・八）

次章に記す通り、府内コレジオは一五八六年一二月末に閉鎖され、関係者一同船で山口に逃れたが、その直前の同コレジオの状況について、一五八六年一一月末に下関港でフロイスが記述した「一五八六年一一月の年報」と題する史料には、次のように見える。

「豊後にはイエズス会士が四六人いる。すなわちパードレ八人、日本人イルマン二二人、ポルトガル人〔イルマン〕一六人であり、この人数の内、府内コレジオにはパードレ三人、イルマン一五人いる。〔中略〕

〔コレジオにおいては〕古典学（ウマニダデ）の学習を始めた日本人イルマンたちは、彼らの学習の苦労は無駄ではないであろうという、極めて確かな期待をわれわれに与える。それは彼ら〔コレジオの日本人イルマン〕や、諸セミナリオで養育されている少年たち（メニノス）についての経験が示す通りである。彼らのラテン語の作文（コンポジンエス）は水準高く、新たに彼らの植付けをした尊師に、決して小さくない喜びと安らぎとを与えることであろう。コレジオにおいてイルマン八人が古典学（ウマニダデ）を聴講している。五人は、教養科目の課程（クルソ・ドス・アルテス）を終えた後に、この二年間神学（テオロジア）を聴講している。これらは皆ポルトガル人である。ラテン語を聴講している者たちの内の三人は、日本人である。他の者たちも彼らと

一緒に始めたが、彼らの学習の糸を断ち切らざるを得ないような、キリスト教会に関する緊急の難局が勃発した。[69]」

右の史料に拠り、閉鎖直前の府内コレジオについて、次の事実が明らかになる。

一、同コレジオには、パードレ三人とイルマン一五人が居住していた。

二、イルマン八人が古典学（つまりラテン語上級）を聴講している。古典学の学習を始めた日本人イルマンは、高水準のラテン語作文が出来るほど上達した。

三、ポルトガル人イルマン五人は二年前に教養科目の課程つまり哲学を終えて、神学を聴講している。

四、ラテン語（ラテン語初級の意味か）聴講者の内、三人は日本人である。

（古典学聴講者八人・神学聴講者五人・ラテン語聴講者四人以上の合計は一七人以上となり、コレジオ在住イルマンが一五人とは合致しない。ラテン語聴講者の中には修練院のイルマンも含むか）

一〇

一五八七年になると、豊後国内の混乱のため、それを逃れていよいよ府内コレジオが山口に移動することになる。

一五八七年六月二〇日付け五畿内発、アントニノ・プレネスティノのイエズス会総長宛書簡には、次のように記されている。

「〔大坂で関白殿に歓待され、援軍派遣の約束をしてもらって〕屋形（ヤカタ）であるフランチェスコ〔大友宗麟〕がそこから戻って何週間が経ち、準管区長（ヴィチェ・プロヴィンチアレ）パード〔ガスパル・コエリョ〕が豊後に来た。パードレたちが協議を始めたところ、薩摩（サツマ）の軍勢が筑後地方（チクシゴプロヴィンチア）の主要な城を攻めようとしているとの報せが届いた。その〔城の〕殿（トノ）は筑紫（シ）〔筑紫広門〕であった。その少し後に、その城は奪われ、筑紫殿（チクシドノ）は囚われの身となったとの別の報せが届いた。

この報せは、豊後の者たちに大なる恐怖と戦慄を与えた。屋形（ヤカタ）フランチェスコは、息子〔義統〕の領土（スタト）は失われたものと考えた。それ故パードレたちに対し、豊後のコレジオと修練院（カザ・デ・プロバティオネ）を移すように勧めた。／（f. 260v.）

準管区長パードレは、極めて迅速に協議を行なった上で、次のようにするのがよいと考えた。第一に、関白殿（クワバクドノ）が支援を送り、上（カミ）から軍勢（ジュンテ）が下向するのかどうか、そして恐れる必要がないかどうかを見極めること。豊後のコ

レジオと修練院を移すなら、まず何処に移すべきかを知らなければならない、と。かくして同パードレは次のように考えた。すなわち、私が京都地域に向けて発ち、其処でパードレたちと共に、軍勢を豊後に下向させるのかどうか、同地の意向を見極めるべきである、と。[70]」

すなわち、領内の戦乱のため、宗麟が府内コレジオの移転を勧め、イエズス会においても準管区長を中心にそれを真剣に検討したこと、要は豊臣秀吉が援軍を送るか否かが決め手になるので、それを早急に確かめなければならない、ということが記述されている。

一五八七年八月五日付けフロイスが記述した一五八七年度イエズス会日本年報に、次のように見える。

「臼杵の諸事情や〔豊後〕国全土の事態がこういった状況になり、城のなかのパードレたちは二つの大なる困惑に包まれた。第一は、修練院にいる多くの修練者のイルマンたちやその他大勢の人々とともに、何処に行くことが出来るであろうか。というのは、府内のあたりには、それは可能ではなかった。というのは市やコレジオが、臼杵が蒙ったのと同じ危険な状態にあったからである。第二に、〔豊後〕国外に去る以外にやりようがないのであるなら、これほどの人々と財とを積み込むことが出来る確かな船舶は、どこにあるのか。というのは、其処や府内にある船舶は、小さくて弱く、僅かな積荷しか運べないからである。とくにその当時はそれら〔船舶〕の持主たちは、自分に益することにのみそれを役立てようと努めていた。[71]」

薩摩軍の攻撃を受けて豊後国がいよいよ危険になり、府内コレジオその他が別の場所に避難することを余儀なくされた経緯については、一五八八年二月二〇日付け有馬発、フロイスが記述した一五八七年度年報に記述されている。次に引用する。因みに本年報は、天正一五年六月一九日付けキリシタン禁令を載せている。

「王フランシスコは、豊後の破壊と滅亡をはっきり認め、城にいる修練院の者たちも、府内のコレジオにいる者たちも、最も主要な財だけを持って山口の諸レジデンシアの内のどれかに避難するように、そして彼〔王〕のもとにはパードレ一人とイルマン二人だけ、方々のレジデンシアには僅かな人数〔のパードレ・イルマン〕を分散して残すように、と強く求めた。その地方の上長であったパードレ・ペ〔ド〕ロ・ゴメスがそのために府内から臼杵に行き、どうすべきか王やパードレたちとよく相談した上で、パードレたちが財を持って豊後

を発つ方策を見つける努力をした。〔中略〕

〔官兵衛（黒田孝高）の口添えの手紙と、アゴスティニョ（小西行長）のために役立ちたいとの思いから、塩飽の異教徒の船頭が〕府内にいるパードレたちと臼杵にいる者たち〔パードレたち〕を、運べるだけの彼らの財と共に、彼の船で下関または山口に、特に当時としては極めて安価に運ぶことを引き受けた。〔中略〕

府内にいるパードレたちは、寝具だけを持って身一つで行ってよい、その他の財を持って行ってはならない、府内にはパードレ一人とイルマン二人だけを残す、という許可を仙石〔仙石秀久〕、および嫡子〔大友義統〕から得ていた。そこのコレジオには、祭服と祭壇用具・書籍・教会の銀製品その他の装飾品など、われわれが豊後で持っていた最も主要な財があったので、この財を隠して持ち出すのに大変な術策を要し、多大な労苦と危険とを被った。〔中略〕

仙石に従って、配下に若干の兵を連れて来た非常に立派なキリスト教徒の貴人が一人偶々府内におり、パードレたちの財を救う手助けを引き受けてくれた。彼は上の者で、尊敬を博している人物であったので、財の最大にして最良の部分を密かに持ち出せるように、手助けをしてくれた。それ故、臼杵のパードレたちも府内の者たち〔パードレたち〕も、最良にして最も主要な財を持って乗船することが出来た。／(f. 106) イエズス会士が三三人で、同宿たちや従僕たちを加えると六五人であった。その他のイエズス会のパードレたち・イルマンたち一三人が、同じ豊後国の様々なレジデンシアに分散して残留したが、これら〔のレジデンシア〕では自らを救うために、その後様々な危険や労苦を被った。〔中略〕

〔十二月末府内の近くから出航〕悪天候のため通常のその航程より多くの日数を費やしはしたが、それでも山口の、下松(72)という港に安着した。其処でパードレたちとイルマンたちの半数が、若干の財を持って下船し、陸路山口に向かった。その他の者たちは残りの財と共に同じ船で下関に向かった。着くまでに、そこから八日かかった。

最初の人々〔下松で下船した半数〕は、多大な労苦と不便に苦しみながら、やっとのことで山口に着き、其処に前からいたパードレたちとキリスト教徒たちに、深い愛徳をもって迎えられた。別の〔下松で下船しなかった〕人々も、よりよく保管が出来る下関に財を降した後に、矢張り山口に向かった。

そこの新しいレジデンシアに、コレジオと修練院（ノヴィシアド）が一緒に加わることになった。彼らは大きなコレジオを作った。それの収容能力はごく小さかったが、〔居住する〕イエズス会士は四〇人以上に上ったからである。このような時に、前述の諸レジデンシアが出来てわれわれがそこに居住できるのは、われらの主のお蔭であり、そして官兵衛殿（カンビオインドノ）〔黒田孝高〕に敬意を払うが故に、われわれは山口で大変厚遇を受け、極めて快適なカザを持つことが出来た。そこは非常に狭くはあるが、パードレとイルマンの全員が居住することができた。彼ら〔パードレ・イルマン〕は、もしもこのようなことが別の時に起こったなら、あのような諸レジデンシアを持つこともなく、あるいは財のみか彼らの命をも失う羽目になっていたかも知れない。この不便と狭さはあるものの、われわれ仲間（オスノスノ）たちは、関白殿（クワンバクノ）の命令によって追放されるまで、この山口にいた。[73]」

右の一五八七年度年報の記述は、豊後国内あるいはその周辺の戦乱のため、宗麟の勧めに従って府内コレジオを閉鎖して、山口に移った様子が詳しく記述されている。右の史料によって、次の事実が分かる。

一、大友宗麟は島津の攻撃を受けて自領が窮地にあることを率直に認め、府内コレジオおよび臼杵修練院を引き払って、主な財を持って山口の諸レジデンシアの内のどれかに避難するよう、そして豊後には僅かなイエズス会士だけを残すよう要請した。

二、黒田孝高と小西行長の協力もあって、豊後から下関・山口までの安価な船便を確保することが出来た。府内コレジオの諸々の用具や書籍、銀製品等を搬出するのに苦労した。秀吉の九州征伐の先鋒として豊後に派遣された仙石久秀の配下のキリスト教徒も、この搬出を手助けした。

三、この時船で豊後を脱出したイエズス会士は三三人、同宿・従僕を加え、全部で六五人であった。豊後に残留したイエズス会のパードレ・イルマンは、一三人であった。彼らは豊後国内の各レジデンシアに分散した。

ここに見えるイエズス会士の人数の記述について、少し記す。

一五八七年一二月ゴアで作成されたイエズス会東インディア管区のパードレ・イルマンの名簿（日本に関しては一五八六年九月～一〇月現在の状況）に拠り、豊後におけるイエズス会施設名と、それぞれの施設に

居住するイエズス会士の人数を記してみる。

	パードレ	イルマン
府内コレジオ	五人	一六人
津久見レジデンシア	一人	一人
野津レジデンシア	一人	一人
臼杵修練院	三人	一六人
由布レジデンシア	一人	一人
志賀レジデンシア	一人	一人
合計	一二人	三六人[74]

豊後からイエズス会士たちが船出したのは、左に記す通り一五八六年一二月二三日であるから、右の如きイエズス会士在豊後の時期とおおよそ同じだと言ってよい。その時豊後を脱出したイエズス会士は全部で三三人、豊後に残留したのは一三人であったという。つまり、脱出する以前は豊後にイエズス会士が四六人いたわけである。名簿に拠ると、同年九月～一〇月当時は、豊後にイエズス会士が全部で四八人いた。

四、出航は一五八六年一二月末（左記の通り、フロイス著『日本史』に拠ると一五八六年一二月二三日府内出発[75]）であった。最初の寄港地は下松港であった。パードレ・イルマンの半数が財を持って下船し、陸路山口に向かった。

五、残りの半数は、そのままさらに八日間の航海を続けて下関で下船して、財をそこに保管し、矢張り山口に向かった。

六、豊後を発った一行は山口に集合することになったが、そこに新たに作られたレジデンシアに、コレジオと修練院のメンバーが居住することになった。居住するイエズス会士は四〇人以上に上った。秀吉の禁令（一五八七年七月二四日）によって追放されるまで、山口にいた。

因みに右の三に引用した一五八七年一二月ゴアにて作成、イエズス会東インディア管区のパードレ・イルマンの名簿（日本に関しては一五八六年九月～一〇月現在の状況）に拠ると、山口にはパードレ一人とイルマン一人駐在していたという[76]。レジデンシアであったとの記述はないが、そのように解してよいであろう。僅かイエズス会士二人しかいない山口レジデンシアを増築したのか、或いは別に新たに建物を作るかして、そこに府内コレジオ・臼杵修練院のメンバーが住むことになったのであろう。豊後から来たイエズス会士三三人を加えて、全部で

四〇人以上のイエズス会士が山口に居住することとなったという。以前から山口にいたイエズス会士は二人だけであったので、両史料の間で人数が合致しない嫌いもあるが、両史料の時期が異なるのであるから、多少の異同は致し方ないと言うべきか。

とにかく右に記した通り一五八六年一二月、府内コレジオを含む在豊後イエズス会士の大部分が同国を脱出して山口に移動したことを区切りに、府内コレジオは廃止されることとなった。

なお、豊後から山口へのコレジオ（および修練院）の移動については、フロイス著『日本史』にも記述されている。同『日本史』には、その話に先だって、いずれ豊後を退去する時のための備えをしていたことも記述されている。まずその関係の記載を引用する。

「準管区長パードレ〔コエリョ〕は、本年〔一五〕八六年九月一六日臼杵を発って下関に向かった。其処は長門国（レイノ）にあり、山口市から一日半の行程であった。というのは、その頃、豊後は動揺しており、思いもよらぬ災難に見舞われたりしていたので、コレジオ・修練院（カザ・デ・アプロヴァサン）[77]、および諸レジデンシアのパードレやイルマンたちにとって、準管区長パードレがあの〔下関〕港に駐在する以上に時宜に叶った対策はなかったからである。あたかも望楼から豊後の出来事を見守り、船舶で彼らを其処から救出したり、必要なその他の手立てを講じたりするためである。[78]〔中略〕

〔パードレ・クリストヴァン・モレイラによって、山口での布教が開始されたことについての記述あり〕それから何日か経って、準管区長パードレ〔コエリョ〕は、下関から山口市に赴いた。カザの地所を見分したり、彼を待っているあの古くからのキリスト教徒たちに会って、彼らを慰めるためであった。[79]〔中略〕

彼〔黒田孝高〕は大坂において準管区長パードレ〔コエリョ〕に対し、まもなく〔関白の〕使者として毛利の国々に向けて出発するので、その山口の新しいレジデンシアに一人のパードレを、責任を持って駐留させる旨約束した。彼はその約束に違うことなく、その通り実行した。[80]〔中略〕

山口の王（レイ）〔毛利〕輝元も約三千〔の兵〕を率いてそこから一レグワのところに到着し、ある仏僧（ボンゾス）たちの寺（モステイロ）に投宿した。パードレ〔準管区長コエリョ〕は、山口で地所を与えられたことに対して礼を述べるために赴いたが、官兵衛殿（クワンビョウエドノ）〔黒田孝高〕が特にパードレに同行した。[81]〔中

略〕

われわれがとくに官兵衛殿の厚意と支援を必要とするものが、まだ二つ残っていた。第一は、その地〔下関〕にわれわれがレジデンシアを一軒持つことであった。(82)

〔中略〕

第二は、〔第一に〕劣らず重要で、三つの特許状(パテンテス)を入手することであった。一つは王輝元のもので、それによって彼が山口と下関の地所を永久に与え、そして彼のすべての国々(レイノス)において神の法(デウス・レイ)を宣布することを許可し、さらに彼の領国内の海陸において、税(ディレイトス)を支払う必要はなく、さらに投宿や、街道(ルアス)の諸々(セルヴィシオス・エ・ミニステリオス)の夫役の義務をわれわれには免じるというものである。仏僧たちは、これらすべてを〔課せられ〕行っている。

他の二通は、類似のいっそう内容を拡充した特許状で、彼〔毛利輝元〕の重立った二人の家老(レンヒドレス)のものである。官兵衛殿はわれわれに対し、それらの草案をわれわれの望み通りにカザで記述するようにと命じ、そうすれば直ちにその通り作成させ、署名させるであろう、と言った。そしてそれはすべて直ぐに履行された。(83)」

右の『日本史』の記述によって、府内コレジオが山口に移動する直前の状況がかなり詳細に判明する。纏めると、次の通りである。

一、毛利輝元はイエズス会士に対し、山口と下関に地所を与え、領内での布教を許可し、税その他仏僧には課した諸々の義務を免除した。毛利領において教会活動を展開させるについて、イエズス会士は黒田孝高から支援を得た。

二、準管区長コエリョは、豊後国が動揺しているので、コレジオ・修練院・諸レジデンシアが難を避けて下関に移動するのが最善の対策であると判断し、一五八六年九月臼杵を発って下関に行き、その時期の到来をうかがった。

三、イエズス会士パードレ・クリストヴァン・モレイラが山口で布教を始めたので、準管区長は下関から山口に行き、毛利輝元から与えられたカザのための地所を見分した。

右の如き経緯あって、いよいよ府内コレジオが豊後での混乱を逃れて山口に移動することになる。先の、一五八七年度年報の記述を補足する意味で、その関係の一連の出来事についての『日本史』の記事を次に引用する。

「前述の如く、府内のコレジオのパードレおよびイル

マンたちは、まさに路頭に迷う危険が間近に差し迫っていた。〔豊後〕国全体が叛き、その〔豊後国の〕大部分が敵の掌中にあったからである。そして現地人たちは互いに掠奪し合っている有様であった。このためコレジオの人々は、祭服と祭壇用具・書籍・教会の銀製品・聖画像等の主要な財とともに安全な場所に移る必要があった。[83]

〔中略〕

こうしてイエズス会士一三人が同豊後国に残留し、府内のコレジオと臼杵修練院のその他のすべての者は、その船に乗り込んだ。イエズス会士三三人で、それに諸カザの同宿と従僕たちを加えて、全部で五五人であった。彼らは下関港に向かったが、折から厳冬期であったので、悪天候で、航海中多大の苦労を味わった。

彼らは府内を降誕祭の二日前に出航し、同じ豊後国内ではあるが、異教徒たちのある港に寄り、そこの妻帯している仏僧の貧しい家屋に携帯用の祭壇を設け、パードレたち全員がミサを捧げ、イルマンたちは聖体を拝領した。

そこからまもなく内海を渡り、一〇日を費やして山口の地の、下松という港に着いた。そこに上陸した一行は、その地の異教徒たちから非常に親切に遇せられ歓待された。

その地〔下松〕からパードレたちは一行の半分の人数を伴って、一八レグワ隔たった山口に陸路向かった。其処〔山口〕にはパードレ・クリストヴァン・モレイラが駐在しており、彼らのために三階建ての家屋を作っていた。〔その工事は〕まだ終わっていなかったが、同パードレは一同を迎え入れ、深い愛情をもって奉仕した。

それから八日後に、イルマン一七人をふくむ残りの半分の人々が乗り、財を積んだ船が下関に着いた。天候がよければ三、四日の航海であるが、一八日もかかった。一同は、すべてに事欠き、大変困窮した有様で到着した。しかも厳寒と荒天を押して旅してきたのであるから、大いに同情に価するものがあった。

彼らは其処〔下関〕で何日間かパードレ・ルイス・フロイスに慰められ、財を異教徒たちのいろいろな家屋に分散して預けた後、同地から一日半の旅程の山口市に向かった。そして其処にすでに先着していた他の一行に合流した。これ程大勢のパードレやイルマンに会うことが出来たことによる、山口のキリスト教徒たちの慰めと喜びは大変なものであった。[85]」

右に引用したフロイス著『日本史』の記述によって、

次の事実が確認出来る。

一、豊後の戦乱を避けて、府内コレジオの人と物を安全な所に移すことを余儀なくされた。

二、府内コレジオ関係者を含む豊後のイエズス会士三三人に同宿・従僕を加えて全部で五五人、それにコレジオの諸々の用具・書籍・銀製品、その他の財を乗せた船は降誕祭の二日前、すなわち一五八六年一二月二三日に府内を発った。豊後国にはイエズス会士一三人が残留した。

三、下松で一行の半数が下船し、陸路山口に向かった。山口駐在のパードレ・クリストヴァン・モレイラが一行のために、三階建ての建物を建造中であった。

四、残りの半数はそのまま船で下関に行った。下関でフロイスに会い、持参した財を異教徒の家に分散して預けた。

五、彼らはそこから陸路山口に向かい、先着していた人々と合流した。

右の『日本史』の記載は、基本的に先の一五八七年年報の記事と同じである。両者の記述が異なるところを中心に少し述べると、船で豊後を脱出した者について、年報ではイエズス会士三三人、同宿・従僕を加えると六五人、豊後に残留したイエズス会士を一三人と記す。これに対し、『日本史』には、脱出したイエズス会士三三人、同宿・従僕を加え五五人、残留イエズス会士一三人と記されている。つまり、双方イエズス会士の人数は合致しているが、同宿・従僕の数に違いがある。

一行が豊後府内を船出した月日について、年報には一五八六年一二月末と記してあるのに対し、『日本史』には降誕祭の二日前、すなわち一五八六年一二月二三日と明記されている。またこの度の豊後脱出により、府内コレジオおよび臼杵修練院の移転先となった山口には、パードレ・クリストヴァン・モレイラが以前から駐在していて、三階建ての建造物を建築中であった旨、『日本史』に記されている。先に引用した一五八七年一二月に作成されたイエズス会東インディア管区のパードレ・イルマンの名簿（日本に関しては一五八六年九月～一〇月現在の状況）には、山口市駐在のイエズス会士として、次の二人を挙げている。

パードレ・クリストヴァン・デ・モレイラ

イルマン・ガスパル定松、大村出身、説教師、日本人[86]

つまり、『日本史』のこの点の記述は、イエズス会名

簿の記載と一致している。右に見た通り府内コレジオは、関係者たちが諸々の用具・書籍・銀製品等を持って一五八六年一二月二三日に船で府内を発ち、山口に逃れたことによって閉校となった。翌一五八七年一月から新たに山口コレジオが始まるが、先の一五八七年年報に記述されていたように、彼らの山口滞在は、秀吉のキリシタン禁令により追放されるまでであったので、同コレジオも極く短期間で消滅してしまう。その短命に終わった山口コレジオの最期については、一五八九年七月二三日付けマカオ発、ヴァリニャーノのイエズス会総長宛書簡に記されている。

「〔暴君関白殿（クワバクンドノ）の迫害により〕山口の国々（アマンダチ・レイノス）において、われわれがその〔山口〕市に有した別の大変大きなカザが破壊された。そこには、豊後のコレジオと修練院（カサ・デ・プロバシオン）が破壊されて後、それらのパードレたちとイルマンたち全員が収容されていた。彼らは全員で四〇人を超え、今回の迫害が始まり其処から追放されるまで、その〔カザ〕に八ヵ月以上滞在した。[87]」

山口に新たに大きなカザを作って、其処に府内コレジオおよび臼杵修練院の居住者を収容したが、そのカザも秀吉のキリシタン禁令発布に伴って破壊され、其処に居住していたイエズス会士たちは追放された。山口コレジオは結局八ヵ月余の短命で終わった。

府内コレジオを設置しながら、結局其処を取り巻く政情や中央のキリシタン禁令に翻弄されて、余り大きな成果を上げることも出来ずに終わった無念の思いを、ヴァリニャーノはイエズス会総長に書簡で訴えている。一五八九年七月二六日付けマカオ発の書簡である。

「〔猊下に報告すべき〕六番目のことは、猊下が私に書き送って来た通り、国王陛下により、さらには教皇聖下により、有馬ではなく府内市に、首都大司教（イグレシア・メトロポリシタド）の教会を作ることが決まった。この件で最大の敬意を払うべきは、フランシスコ王（レイ）〔大友宗麟〕の功績に対してかも知れない。有馬〔王〕のそれよりも大きいからである。しかし昨年書き送った通り、フランシスコ王はすでに死亡し、豊後は現在、其処に司教が駐錫するための受入れ態勢（アバレホ）が整っていない。府内市は豊後国（レイノ）の中で最も主要〔な市〕であるが、その住民は極めて頑迷な異教徒たちであって、われわれは篤い情熱と配慮をもって豊後の改宗が滅びないよう努めたフランシスコ王を擁したにもかかわらず、そしてわれわれは其処にコレジオを有したにもかかわらず、その〔府内〕市において豊かな実りを得るこ

とは出来なかった。約八〇〇〇人の住民がいたあの〔府内〕市において、われわれは辛うじて五〇〇または六〇〇人のキリスト教徒を得るに至ったに過ぎない。しかもその大部分は、これらの戦において、殺戮・捕囚・飢え・疫病によって死亡した。[88]」

一一

以上府内コレジオ創設に至るまでの経緯と、設立から山口移動までのその活動について、努めて史料に即して記述してきたが、最後にその〝前史〟の部分は省き、同コレジオの活動の基本的な事実のみを摘記する。

府内コレジオの創設・規模・移動

一、イエズス会は日本人イルマンが学習するために、府内のカザをコレジオに改変することにした。すなわち、当初はその主たる目的は、日本人会員の教育にあったようである。

二、コレジオ開設は、一五八〇年一〇月頃であったと思われる。それは、聖パウロ・コレジオと呼ばれた。

三、府内コレジオの所在地については、イエズス会にとって希望に叶ったものではなく、同コレジオ発足当初から移転を強く望んでいた。府内に設置すること自体に対する疑問は、五に記す通りである。

四、コレジオの建物は、部屋一つと小部屋五つあるだけであった。この内新しく増築されたのは五つの小部屋で、大部屋の方は、古くからあったカザのそれを利用したもののようである。

五、開設されてから約四年経過した一五八四年末頃のことであるが、府内コレジオと臼杵修練院を豊後から下地域に移した方がよいという声が、在日イエズス会士に起こっていた。コレジオ・修練院といった中核機関――そこには相当の人数が居住する――は下つまり長崎の辺りの、諸条件に叶う土地に設置するのがよいということである。

キリシタン大名とはいえ耳川の戦に敗れて以後の大友領に、諸機関を置くことの意義が薄れていたことなら、それはコレジオ開設時すでに基本的に同じである。大友氏の側の希望もあって豊後の府内にコレジオを、臼杵に修練院を創建したが、恐らく日本イエズス会内では当初から、豊後にそれらを設置することを疑問視する意見はあったのであろう。そして時の経過と共に、それらをこのまま豊後に置くことに対するフロイス等の反対意見が、一段と強まったのであろう。

六、一五八六年頃には大友領内の戦況さらに厳しさを増し、そのため大友宗麟は府内コレジオの移転を勧め、イエズス会においても準管区長を中心にそれを真剣に検討した。秀吉の援軍派遣に希望をつなぐ向きもあったようである。しかし宗麟は、島津の攻撃を受けて自領が窮地にあることを率直に認め、府内コレジオおよび臼杵修練院を引き払って、主な財を持って他の地のレジデンシアに避難するよう要請し、実行に移されることになる。

七、豊後を船で脱出したイエズス会士は三三人、同宿・従僕を加え、全部で六五人（イエズス会年報に拠る。フロイス著『日本史』では五五人）であった。つまり、同宿・従僕は三二人（イエズス会年報に拠る。『日本史』では二二人）。豊後に残留したイエズス会のパードレ・イルマンは、一三人であった。

出航は一五八六年一二月二三日、寄港地の下松港でパードレ・イルマンの半数が財を持って下船し、陸路山口に向かった。

残りの半数は、そのままさらに八日間の航海を続けて下関で下船し、財をそこに保管して、矢張り山口に向かった。府内を発ったイエズス会の一同は、山口に集合することになった。山口には、毛利輝元から下付された地所もあり、かかる事態を予想し、その備えとして同地駐在のパードレ・クリストヴァン・モレイラが一行のために、コレジオと修練院用に三階建ての建物を建造中であった。

山口コレジオに居住することになったイエズス会士は、四〇人以上であった。山口コレジオは、秀吉の禁令（一五八七年七月二四日）によって建物は破壊され、居住者たちは追放された。

府内コレジオの居住者

一、一五八一年九月一五日現在の居住者

A　パードレ二人

ベルシオル・デ・フィゲイレド（院長）

アントニノ・プレネスティノ（ラテン語教師）

B　イルマン八人（ポルトガル人五人、日本人二人、その内一人は養方軒パウロ、実務助修士（コアジュトル）一人）

二、一五八二年二月一五日現在の居住者

A　パードレ三人

B　イルマン一〇人

C　同宿と従僕一七人程

三、一五八二年二月現在の居住者

A パードレ七人

ガスパル・コエリョ

ルイス・フロイス

ペドロ・ゴメス

メルシオル・デ・フィゲイレド

アントニノ・プレネスティノ

ジョルジェ・カルヴァリャル

フランシスコ・カルデロン

B イルマン一〇人（その内日本人二人、実務助修士一人）

アマドル・デ・ゴイス

ペドロ・コエリョ

アンドレアス・デ・オリア

ミゲル・ソアレス

フランシスコ・ピレス

ルイス・デ・アブレウ

ジョアン・ロドリゲス

シモン（日本人）

養方軒パウロ（日本人）

マヌエル・ボラリョ（実務助修士（コアジュトル）、厨房係（ソトミニストロ））

四、一五八三年一一月一二日現在の居住者

A パードレ三人

メルシオル・デ・フィゲイレド（院長）

アントニノ・プレネスティノ（哲学課程の教師）

クリストヴァン・モレイラ

B イルマン一二人

ヨーロッパ人修学生九人（哲学課程五人、ラテン語四人）

日本人イルマン二人（マティアスおよびリアンか）

実務助修士一人

五、一五八三年一一月一五日現在の居住者

A パードレ三人

メルシオル・デ・フィゲイレド（院長）

アントニノ・プレネスティノ（論理学の教師（ロジカメストレ））

クリストヴァン・モレイラも居住か

B イルマン一二人

修学生（エストゥダンテ）九人

ミゲル・ソアレス（一五八三年一〇月半ばから論理学を受講）

ガスパル・マルティンス（一五八三年一〇月半

ばから論理学を受講）
アマドル・デ・ゴイス（一五八三年一〇月半ばから論理学を受講）
ペ〔ド〕ロ・コエリョ（一五八三年一〇月半ばから論理学を受講）
ジョアン・ロドリゲス（一五八三年一〇月半ばから論理学を受講）
マノエル・ボラリョ（ラテン語を学習、一年余文法（グラマティカ）受講済み、厨房係兼務）
ジェロニモ・コレア（ラテン語を学習、一年余文法受講済み）
シマン・ゴンサルヴェス（ラテン語を学習、初心者）
アンドレ・ドリア（ラテン語を学習、初心者）
日本人イルマン二人
マティアス（説教者（プレガドル））
リアン（説教者）
実務助修士一人
ジェラルディノ

六、一五八四年一月二日現在の居住者
院長およびパードレ二人

七、一五八六年九月～一〇月現在の居住者
A　パードレ四人
ペドロ・ゴメス（豊後の全レジデンシアの上長（スペリオル）、諸教会（エクレシアス）を巡回）
フランシスコ・カルデロン（院長（レクトル）、神学（テオロジア）の講師（レクトル）、諸教会を巡回）
ジョアン・ロドリゲス〔・ジラン〕（副院長（ミニステル）、諸教会を巡回）
フルヴィオ・グレゴリオ（諸教会を巡回）
B　イルマン一六人
外国人修学生一二人
ミゲル・ソアレス（神学（テオロジア）を受講（アウディトル））
ジョアン・ロドリゲス〔・ツズ〕（神学を受講）
ペドロ・コエリョ（神学を受講）
アマドル・デ・ゴイス（神学を受講）
ジェロニモ・コレア（神学を受講）
ルイス・デ・アブレウ（文法（グラマティカ）を学習）
アンドレ・ドリア（文法を学習）
フランシスコ・ドリア（文法を学習）
ガスパル・カルヴァリョ（文法を学習）
ジョアン・ゴメス（文法を学習）

フェリペ・ゴメス（文法を学習）
フランシスコ・カルヴァリョ（文法を学習）
日本人三人
シモン（大村出身日本人、文法を学習、説教者）
ペドロ〔・チクアン〕（口之津出身日本人、文法を学習、説教者）
ジョアン・デ・トレス（パードレ・ペドロ・ゴメスの同伴者（ソンウス）、日本人説教者）
実務助修士一人
バルタザル・コレア（実務助修士（コアジュトル）、厨房係（スプミニステル））

八、一五八六年一一月末現在の居住者
A パードレ三人
B イルマン一五人

府内コレジオの授業・教師

一、一五八一年九月一五日現在
ラテン語の授業、教師はアントニノ・プレネスティノ
日本語の授業、教師は養方軒パウロか
二、一五八二年二月一五日現在
古典学（つまりラテン語上級）の授業、および日本語の授業
一五八二年には、修辞学（レトリカ）（古典学の一環か）の授業が始まる予定
日本語の授業、教師は養方軒パウロか
三、一五八三年一一月現在
教養科目（論理学とも、つまり哲学）開講、巡察師と準管区長の指示に拠る。教師はアントニノ・プレネスティノ（彼はそれに造詣が深いわけではないが、布教・司牧の代りに論理学を講義。論理学を要綱風に要約して講じるもので、今後の講義には危惧）、五人のイルマンが受講（日本人含まず）
ラテン語、教師はアントニノ・プレネスティノか
日本語、教師は養方軒パウロとミゲルの、二人の日本人イルマンか
四、一五八四年一月二日現在
教養科目（つまり哲学）の授業開講、五、六人のイルマンが受講
古典学（つまりラテン語上級）、その他のイルマンたちが受講
五、一五八四年一二月二〇日現在
哲学、毎日二時間授業、教師はアントニノ・プレネス

		ラテン語	哲学	神学	日本語
一五八〇年十月～十一月 開講					
一五八一年九月一五日	教師 生徒	一人 有			一人
一五八二年二月一五日	教師 生徒	有（古典学・修辞学予定） 有			一人
一五八三年十一月	教師 生徒	一人 四人	開講　一人 五人		
一五八四年一月二日	教師 生徒	有（古典学） 有	有 五～六人		
一五八四年十二月二十日	教師 生徒	古典学（毎日一時間） 文法（毎日一時間）	一人（毎日二時間） 五人		
一五八五年、復活祭後	教師 生徒			神学　開講 秘跡　開講	
一五八五年八月二十日	教師 生徒	日本人イルマン四～五人	一年半余続いた 授業終了		
一五八五年十月三十日	教師 生徒	中断		中断	
一五八六年九月～十月	教師 生徒	古典学・文法 九人		一人 五人	
一五八六年十一月末	教師 生徒	古典学、文法 古典学八人 文法四人以上		有 ポルトガル人 イルマン五人	

ティノ、プレネスティノが古典学を教授した

修学生五人が受講

古典学、毎日一時間

文法（つまりラテン語初級）、毎日一時間、臼杵修練院で修練期を終えた日本人イルマン四～五人が受講

六、一五八五年八月二〇日現在

哲学（一五八三年末～八四年初開講）が終了。受講してきた修学生たちは、引き続き神学の授業を受講、つまり、毎日二時間程度、一年数か月間で哲学の授業が終了

七、一五八五年四旬節後（つまり復活祭後）、神学

の二授業が開講、一つは神学、教師はペドロ・ゴメス。今一つは秘跡について、教師はアントニノ・プレネスティノ

八、一五八五年一〇月三〇日現在
神学（一五八五年復活祭後に開講）およびラテン語の授業が中断

九、一五八六年九月～一〇月現在
神学（再開時不詳）、教師はフランシスコ・カルデロン

一〇、一五八六年一一月末現在
古典学、イルマン八人（日本人を含む）が受講
神学、ポルトガル人イルマン五人が、哲学を終えて二年前から受講
ラテン語、受講者の内三人は日本人

一一、府内コレジオの教育機関としての活動の成果を総括すると、日本人の受講者は修練院のイルマン四～五人がラテン語を学習しただけで、その先に進んで哲学・神学を受講した者はいなかったと言ってよい。実態に即して言うなら、府内コレジオの目的は当初の意図とは違いヨーロッパ人修学生（つまりイルマン）の教育にあり、彼らは内実はとにかく、ラテン語から始って哲学を経て神学まで受講した。

右に記したコレジオの授業の状況のみを表示する（前頁）。

府内コレジオが関わる教科書・著作

一、一五八二年二月一五日現在、養方軒パウロの協力などあって、日本語の文法書
おそらくはいずれ一五九五年天草版拉葡日辞典になるべき準備段階の辞書
おそらくはいずれ一五八六年リスボン刊ヴァリニャーノのカテキスムスになるべき準備段階の論著
おそらく『サントスの御作業の内抜書』等の準備段階の聖人伝・信仰書が作られた。

二、一五八三年一一月一二日現在、教養科目すなわち哲学のテキストは、パードレ・トレドの著作を要約して使用する予定。フランシスコ・デ・トレドのことであろうが、彼のどの著作か不明である。

三、一五八四年一二月二〇日現在、哲学・神学のテキストとしては、コレジオについては書名・著者名は見え

ず、幾つかの著作による要綱とのみ記述、そのテキストについては、教師・修学生ともに不満があった。

ゴメスが、神学の或る論題の要綱の作成に着手、しかし支障があって進行は遅滞していた。

府内コレジオの財源・経費

一、コレジオ運営のための基金として、ポルトガル国王セバスティアンがマラッカ税関収入から年一〇〇〇ドゥカドを永久に給与した。おそらく一五八一年に、受領が始まった。

二、同国国王エンリケが、年一〇〇〇クルザドの定収入を五年間追加支給した。続くフィリペ一世が、この一〇〇〇クルザドの給与をさらに五年間延長した。しかし府内コレジオの基金は、最初の一〇〇〇クルザドのみであった。

三、教皇が一五八三年日本イエズス会に年四〇〇〇ドゥカドを給与したので、国王給付の一〇〇〇クルザドに替わってこの教皇給付金の中から、ヴァリニャーノの判断による金額を府内コレジオに振り向けるよう総長が命じた。

四、しかし、府内コレジオに限るならば、結局最後まで

その基金はマラッカでの国王給付一〇〇〇クルザドのみであったと言ってよい。もっともその一〇〇〇クルザドにしても、これだけの基金付きの府内コレジオを設立する、あるいは設立を認可するということであって、多分に建前が優先した話と言ってよいであろう。つまり、府内コレジオのこの基金が常に全額、同コレジオのみに消費されたことはあり得ない。

五、府内コレジオの経費は、一五八二年には年一〇〇〇ドゥカド計上された。

六、一五八三年の史料に拠ると、同コレジオに経費として毎年四五〇タエル渡された。

註

（1）Archivum Romanum Societatis Iesu, Jap. Sin. 9-II, f. 179, 179v.

（2）一五八二年二月二〇日天正少年使節と共に日本を発ち、同年三月九日マカオ着、同年一二月三一日マカオを発った。

Josephus Franciscus Schütte, Introductio ad Historiam Societatis Jesu in Japonia 1549-1650, Romae, 1968, p. 1025.

（3）Francisco Rodrigues, A Companhia de Jesus em Portugal e nas Missões, Pôrto, 1935, pp. 35, 37.

(4) Josef Franz Schütte, Monumenta Historica Japoniae, I, Romae, 1975, p. 1183.

(5) Ibid., I, p. 1155.

(6) Ibid., I, pp. 152, 153.

(7) 拙著『キリシタン時代の文化と諸相』八木書店、二〇〇一年、二五三～二六三頁。

(8) Schütte, Monumenta Historica Japoniae, I, pp. 178-181.

(9) Arquivo Histórico Ultramarino, Códice 1659, ff. 277-283v. 拙著『キリシタン時代の文化と諸相』二四九～二六三頁。

(10) Jap. Sin. 52, f. 267. João Paulo Oliveira e Costa & Ana Fernandes Pinto, Cartas Ânuas do Colégio de Macau (1594-1627), Macau, 1999, p. 81. 拙著『キリシタン時代の文化と諸相』八八・八九頁。

(11) Enciclopedia Vniversal Ilvstrada, LXII, Madrid, pp. 491, 492. Charles E. O'Neill & Joaquín M.ª Domínguez, Diccionario Histórico de la Compañía de Jesús, IV, Roma-Madrid, pp. 3807, 3808.

(12) Carlos Sommervogel, Bibliothèque de la Compagnie de Jésus, VIII, 1898, pp. 64-82.

(13) 拙著『キリシタン時代の文化と諸相』五一一～五三七頁。

(14) Schütte, Monumenta Historica Japoniae, I, p, 1307.

(15) Biblioteca da Ajuda, 49-V-11, ff. 120v., 121.

(16) Pierre Humbertclaude, "Recherches sur deux Catalogues de Macao (1616 & 1632)", Biblioteca Nipónica, III, Sociedade Luso-Nipónica, Toquio, 1942, pp. 46, 53, 55. なお、これら三点の著作――Humbertclaude の論考の通し番号（95）（123）（131）の書籍――は、Sommervogel に拠ると、トレドの著作リストの（7）（8）（10）である。

(17) Charles E. O'Neill & Joaquín M.ª Domínguez, op. cit., I, p. 353. Schütte, Monumenta Historica Japoniae, I, p. 1257.

(18) このヌネス・バレト日本携行書籍目録には、ヴィレラ、フロイス、ゴイス携行書籍の目録も併記されている。つまりその頃イエズス会が日本に齎した、すべての書物を一覧にしたものと見てよいであろう。Ioseph Wicki, Documenta Indica, III, Romae, 1954, pp. 201-205. 東京大学史料編纂所『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』訳文編之二（上）、東京大学出版会、一九九八年、二六〇～二六九頁。

(19) Jesús López Gay, "La Primera Biblioteca de los Jesuítas en el Japón (1556) Su contenido y su influencia", Monumenta Nipponica, XV, 1959-60, Sophia University, pp. 350-379.

(20) 大友義統。小論（上）一三三頁。

(21) 原語は laa (f. 182). イエズス会本部、あるいは本部のあるローマを指す。書簡の差出人フィゲイレドは、巡察師ヴァリニャーノが少年使節に同行してローマにまで行くものと思っていたようである。

(22) Mathias.「一五八一年一一月一〇日日本に存在するイエズス会のコレジオとカザ、およびパードレ・イルマン

の名簿（ロル）」と題する史料には、府内の聖パウロ・コレジオ居住者には Mathias の名は見えず、由布のレジデンシア（カザ・デ・レジデンシア）の居住者として、「イルマン・マティアス、日本人、説教者」Ir. Mathias, Japão, pregador. と記されている。

Schütte, Monumenta Historica Japoniae, I, p. 124.

(23) Lião. 同右名簿には、府内コレジオ居住者には Lião の名は見えず、野津のレジデンシア（カザ・デ・レジデンシア）の居住者として、「イルマン・ファンカ・リアン、日本人、説教者」Ir. Fança Lião, Japão pregador. と記されている。

Ibid., p. 124.

(24) Manoel Borralho. 小論（上）註(117)に記した通り、同右名簿には、府内コレジオ居住者に、厨房係（ソトミニストロ）として彼の名が見える。

Ibid., I, p. 124.

(25) Geronimo Correa. 同右名簿に、府内の修練院（カザ・デ・ノヴィアサン）居住のポルトガル人修練者（ノヴィソ）として、Ir. Jerônymo Correa の名が見える。

Ibid., I, p. 123.

(26) Simão Gonçalvez. 同右名簿に、府内修練院居住のポルトガル人修練者（ノヴィソ）として、Ir. Simão Gonçálvez の名が見える。

Ibid., I, p. 123.

(27) Amdre Doria. 同右名簿に、同じく府内修練院居住ポルトガル人イルマンとして、Ir. André Dória の名が見える（修練者（ノヴィソ）ではなく、イルマンとして）。

Ibid., I, p. 123.

(28) Gonçalo Rabello. 同右名簿に、由布レジデンシア（カザ・デ・レジデンシア）の居住者として、P.e Gonçalo Rabello の名が見える。

Ibid., I, p. 124.

(29) Johão Baptista. 同右名簿に、野津レジデンシア（カザ・デ・レジデンシア）の居住者として、P.e João Bautista の名が見える。

Ibid., I, p. 124.

(30) 大友宗麟が居住する村とは津久見のことで、そこにパードレ一人とイルマン一人が滞在していることについては、一五八四年一月二日付けフロイス記述になる、一五八三年度イエズス会年報に記載が見える。次の通りである。

「彼〔王宗麟〕は（すでにわれわれが貴地に書き送ったように）臼杵から三レグワの津久見（アウクミ）と称する所に居住している。彼はこの度其処に、何軒かの立派な家を自分のために建て、その邸内に、ミサに与るため美しい礼拝堂（オラトリオ）または小聖堂（カペラ）を作った。〔王が〕彼の老後の休息所として、彼が居住しているその地域を嫡子（プリンシペ）〔義統〕から譲ってもらうことを望んだので、彼〔嫡子〕が昨年、其処を彼〔王〕に与えた。〔王は〕同地を所有した翌日直ちに、その地域にある三つの寺院（モエステイロス）にあるすべての仏像（バゴデス）（補註1）を破壊させようと、イルマン二人を呼びにやり、イルマンたちに対し、それらを一つ残らず焼き払うよう依頼した。そしてその通り実行された。〔中略〕

その地は平穏なので、現在パードレ一人とイルマン一人が駐在する前述のこの小寺院（モエステイリョ）には、豊後国の仏僧（ボンソス）たちが一つの木箱を宝物として密蔵していた、云々。（補註2）」

（補註1） pagode の語は、東インディアにおいてヒンドゥー教寺院の意味で使用されることが多かったが、広義に使用される場合は、イスラム教・仏教の寺院や諸々の異教の偶像を意味したという。拙訳『大航海時代の日本』八木書店、二〇一一年、七二～七四頁。

（補註2） Jap. Sin. 45-I, f. 67v. Segunda parte das cartas de Iapão que escreuerão os padres,& irmãos da Companhia de Iesus, Évora, 1598, reprint, Maia, 1997, f. 97v. 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』Ⅲ、六、同朋舎出版、一九九一年、一九四頁。村上直次郎訳、柳谷武夫編輯『イエズス会日本年報』上、雄松堂書店、一九六九年、二五六頁。

(31) Miguel Soarez. 註(22)に記した名簿に、府内コレジオ居住者のポルトガル人修学生（エスコラスティカ）として、Ir. Miguel Soares の名が見える。

Schütte, Monumenta Historica Japoniae, I, p. 124.

(32) Gaspar Martins. 同右名簿に、府内の修練院（カザ・ド・プロヴァサン）居住者の、教師（メストレ）の同伴者（コンパニェイロ）ポルトガル人として、Ir. Gaspar Martins の名が見える。

Ibid., I, p. 123.

(33) Amador de Gois. 同右名簿に、府内コレジオ居住者のポルトガル人修学生（エスコラスティカ）として、Ir. Amador de Góis の名が見える。

Ibid., I, p. 124.

(34) Pero Coelho. 同右名簿に、府内コレジオ居住者のポルトガル人修学生として、Ir. Pedro Coelho の名が見える。

Ibid., I, p. 124.

(35) Johão Rodriguez. 同右名簿に、府内コレジオ居住者のポルトガル人修学生として、Ir. João Rodriguez の名が見える。

Ibid., I, p. 124.

(36) Pero Remão. 同右名簿に、府内の修練院居住者の、院長（レイトル）兼修練者たちの教師（メストレ）として、カスティリャ人（ノヴィシス）Pe Pedro Remão の名が見える。

Ibid., I, p. 123.

(37) Gerardino. 同右名簿には、このイルマンの名は見えない。しかし、一五八三年イエズス会日本管区のパードレ・イルマンの名簿には、実務助修士（コアジュトル・テンポラル）の一人として Ir. Jerardino の名が記されている。

Ibid., I, pp. 123–127, 179.

(38) 下線箇所の原語は ler a mea. 論理学を半分まで講義する、という意味か。

(39) 下線箇所の原文は a logica se le por mão de sumula e abrevidamente. と読める。

(40) padre Laguna. Francisco de Laguna のことである。スペイン人、一五七〇年一二月イエズス会入会、七四年インディアに向けて発ち、七六年インディアを発ち、七七年来日、七九年司祭叙階を受けるためにマカオに行き、八〇年半ばに司祭になって日本に戻った。主に豊後で活動した。

Schütte, Monumenta Historica Japoniae, I, p. 1210.

(41) Jap. Sin. 9–II, f. 182, 182v.

(42) Schütte, Monumenta Historica Japoniae, I, p. 109.

(43) Luís Fróis, Historia de Japam, José Wicki ed., III, Lisboa, 1982, p. 173. 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス　日本史』7、中央公論社、一九七八年、三三〇頁。

(44) Schütte, Monumenta Historica Japoniae, I, p. 124.

(45) Ibid., I, pp. 154, 155.

(46) Ibid., I, p. 178.

(47) Ibid., I, p. 205.

(48) Jap. Sin. 51, f. 20.

(49) Schütte, Monumenta Historica Japoniae, I, p. 204. C. R. Boxer, The Great Ship from Amacon, Lisboa, 1959, pp. 49, 50.

なおフィゲイレドの病気については、フロイス著『日本史』にも記載が見える。すなわち、一五八四年フィゲイレドが上京して曲直瀬道三の治療を受けたこと、彼が治療を受けていた頃に、道三がパードレ・オルガンティノから洗礼を受けたことなどが記述されている。

Fróis, op. cit., IV, 1983, pp. 196, 198, 199, 201. 松田・川崎訳、前掲書、5、一九七八年、一七九・一八三・一八五・一八七頁、9、一九七九年、一七四・一七五頁にフィゲイレドの略伝。

(50) Rector et lector theologiae.

Schütte, Monumenta Historica Japoniae, I, p. 207.

(51) Jap. Sin. 45–I, f. 68v.

(52) Segunda parte das cartas, Évora, 1598, reprint, f. 98.（但し、この辺り葉数に混乱が見られる）。松田毅一監訳、前掲書、Ⅲ、六、一九六頁。村上直次郎訳、柳谷武夫編輯『イエズス会日本年報』上、二五八頁。

(53) Segunda parte das cartas, Évora, 1598, reprint, 125v. 松田毅一監訳、同右、Ⅲ、六、二九二頁。村上直次郎訳、柳谷武夫編輯、同右、下、一九六九年、一〇四頁。

(54) Jap. Sin. 9–II, ff. 330v., 331.

(55) Schüttte, Introductio ad Historiam Societatis Jesu in Japonia 1549–1650, pp. 1004, 1005. Schüttte, Monumenta Historica Japoniae, I, pp. 259, 1293, 1294.

(56) Juan Crisóstomo Javelli（Crisostomo Giavèlli ; Chrysostome de Casale）のことか。一四七〇年頃生まれのイタリア人ドミニコ会士、一四八八年ミラノのサンタ・マリア・デ・ラス・グラシアス修道院所属、ロンバルディア Lombardia 管区長、ボロニャ Bológna 大学教授等を務めたが、後に現職から身を引いて、哲学・神学の著述に専念した。その著作は多数に上る。Compendium 云々と題する著作もあるが、果して本アントニノ書簡に見えるJavello の要綱とはそれを指すと推定してよいものか、疑念も残る。

なお、註(18)および左の註(57)に記したメルシオル・ヌネス・バレト将来書籍目録、註(13)および註(57)の(補註2)に記したマカオ・コレジオ蔵書目録、註(15)および註(57)の(補註3)に記した司教ヴァレンテ蔵書目録には、Javelli の著作は含まれないようである。

Dictionnaire de Théologie Catholique, VIII–1, Paris, 1947, pp. 535–537. Enciclopedia Vniversal Ilvstrada,

XXVIII (II), pp. 2611, 2612. La Piccola Treccani, Dizionario Enciclopedico, V, Roma, p. 712.

(57) Francisco Titelman (François Titelmans) のことであろう。一五〇二年ベルギー、リンブルクのハッセルト Hsselt (Limburg) で生まれ、同国ルーヴァン Louvain で学び、とくに古典語に関して研鑽を積んだ。一五二三年フランシスコ会原会則派 Observantes に入会したが、一五二五年にはカプチン会 Capuchinos に移った。同会の上長たちは直ぐに、哲学と神学の学問を彼に課した。ルーヴァンで講義をした。ハッセルト・アカデミーの院長を務めた。一五三五年頃ローマに行き、ミラノで神学を講じる職を与えられたが辞退し、救貧活動に従事した。しかしその後彼はローマ管区長 ministre provincial に任じられ、一五三七年九月一二日死亡した。

多数に上る彼の著作は、ルーヴァンで教職にあった時に著述されたものである。信仰書一冊以外すべてラテン語で書かれた。これ以外のすべての著作は、哲学・聖書解釈学・修徳神学 teologia ascetica・歴史の四つに分類出来る。彼の聖書解釈は、エラスムスに異を立てるものであった。

註(18)に記したパードレ・ヌネス・バレト日本将来書籍目録には、ティテルマノの著作が三点見える。

一、Titalmano super Cantica.

二、Comentario super Eclesiastes.

三、Philosophia de Titalmano. の三点である。翻刻本（ヴィッキ編）には、

一は Commentarii in cantica canticorum Salomonis, Antverpiae, 1536.

二は Commentarii in Ecclesiasten Salomonis, Antverpiae, 1536.

三は Compendium philosophiae naturalis, libri XII, Lugduni, 1545. を指す旨の註記がある。

また右の目録に併記されたパードレ・ガスパル・ヴィレラ将来書籍目録にも、ティテルマノの著作が一点見える。すなわち、

Summa Misteriorum Fidei. である。翻刻本には、

Summa mysteriorum christianae fidei, Antverpiae, 1532.

を指す旨の註記がある(補註1)。

マカオ・コレジオの蔵書目録（一六一六年）（補註2）および日本司教ディオゴ・ヴァレンテの蔵書目録（一六三三年一〇月二八日）（補註3）には、彼の著書は見えない。

（補註1） Documenta Indica, III, Ioseph Wicki ed., Romae, 1954, pp. 202–204.『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』訳文編之二（上）、二六二・二六三・二六五・二六六頁。

（補註2） Humbertclaude, “Recherches sur deux catalogues de Macao (1616 & 1632)”, pp. 6–23. Humbertclaude, “Suppléments aux “Recherches sur deux Catalogues de Macao”(1616–1632)”, Monumenta Nipponica, VI, pp. 435–438. 拙著『キリシタン時代の文化と諸相』五一二頁～五三七頁。

（補註3） Humbertclaude, “Recherches”, pp. 24–83.

Humbertclaude, “Suppléments”, pp. 438–444.

なお本アントニノ書簡に見えるティテルマノの要綱は、右に記したヌネス・バレト将来書籍目録中の、ティテルマノの著作の三である可能性もあるが、確言は出来ない。Dictionnaire de Théologie Catholique, XV–1, 1946, pp. 1144–1146. Enciclopedia Cattolica, XII, Città del Vaticano, p. 145. Enciclopedia Vniversal Ilvstrada, LXII, p. 133. J. L. Gay, “La Primera Biblioteca de los Jesuítas en el Japón (1556)”, pp. 149, 150, 156, 160.

(58) ここに、ペドロ・ゴメスが神学の要綱（コンペンディオ）を作成し始めた旨、記述されている。ゴメスは、期待通りの著述は出来そうになく、その仕事に余り気が進まず、進行も遅々としていた、という。ゴメスがコレジオのテキストとして著述する要綱（コンペンディオ）は、一五九三年に出来上がる。ゴメスの要綱著述の経緯、要綱原文の翻訳・翻刻、その歴史的意義等については、尾原悟神父の研究がある。

尾原悟「ヨーロッパ科学思想の伝来と受容」『近世科学思想』下（『日本思想大系』63）岩波書店、一九七一年。尾原悟「キリシタン時代の科学思想――ペドロ・ゴメス著「天球論」の研究――」『キリシタン研究』一〇輯、吉川弘文館、一九六五年。尾原悟編著『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』Ⅰ～Ⅲ（『キリシタン研究』三四輯～三六輯）教文館、一九九七年～一九九九年。Joseph Schütte, “Drei Unterrichtsbücher für Japanische Jesuitenprediger aus dem XVI. Jahrhundert”, Archivum Historicum Societatis Iesu, VIII, 1939.

(59) Jap. Sin. 9–II, f. 336, 336v.

(60) British Museum, Add. 9859, f. 9.（東京大学史料編纂所、7519–175–1. この史料の閲覧について、岡美穂子氏のお世話になった）。Segunda parte das cartas, Évora, 1598, reprint, f. 133v. 松田毅一監訳、前掲書、Ⅲ、七、一九九四年、三・四頁。村上直次郎訳、柳谷武夫編輯『イエズス会日本年報』下、一・二頁。

(61) 名簿の職務欄にConcionatorと記されている。ポルトガル文の同類史料に見えるpregador「説教者」を意味するものと判断してよいであろう。

(62) Schütte, Monumenta Historica Japoniae, I, pp. 158–161.

(63) Ibid., I, p. 180.

(64) Jap. Sin. 10–I, f. 58v.

(65) 外山幹夫『大友宗麟』（人物叢書）吉川弘文館、一九七五年、二五七～二六五頁。『史料綜覧』一二、東京大学出版会、一九八二年、一四・一二五頁。

(66) Segunda parte das cartas, Évora, 1598, reprint, ff. 146–152. 松田毅一監訳、前掲書、Ⅲ、七、三七～五二頁。村上直次郎訳、柳谷武夫編輯『イエズス会日本年報』下、七九～九五頁。

(67) Segunda parte das cartas, Évora, 1598, reprint, ff. 159v., 160. 松田毅一監訳、同右、Ⅲ、七、七三～七七頁。村上直次郎訳、柳谷武夫編輯、同右、下、一〇八～一一〇頁。

(68) Schütte, Monumenta Historica Japoniae, I, pp. 207,

208.

(69) ポルトガル文の第一便文書は Jap. Sin. 45–II, f. 96v. スペイン文文書は Jap. Sin. 50, f. 53v. ポルトガル文文書に拠って訳載したが、一部スペイン文文書を参照することによって文意を明確にし得た箇所もある。本文書の末尾に、「この〔年報〕は、豊後国の滅亡以前に記述された。」と記されている。Jap. Sin. 45–II, f. 99v.

(70) Jap. Sin. 10–II, f. 260, 260v.

(71) Jap. Sin. 51, f. 92.

(72) 原語は Candamaxo（Jap. Sin. 45–II, f. 106）, Cudacumeu（Segunda parte, f. 194v.）、なおこの時のイエズス会士たちの豊後脱出については、フロイス著『日本史』にも記述されているが、そこではこの地名が Cundamaçu と記されている。

Segunda parte das cartas, Evora, 1598. についての村上訳には日本語による地名同定がなされておらず、松田訳には「下松」と記されている。Fróis, Historia de Japam の編者ヴィッキ神父は Kudamatsu 港のことだと註記する。松田・川崎訳でも、「下松」と記す。

Fróis, op. cit., IV, p. 315. 松田毅一監訳、前掲書、Ⅲ、七、一七四頁。松田・川崎訳、前掲書、8、一九七八年、二〇九頁。

(73) Jap. Sin. 45–II, ff. 105v., 106. Segunda parte das cartas, Evora, 1598, reprint, ff. 193v.–195. 松田毅一監訳、前掲書、Ⅲ、七、一七二～一七五頁。村上直次郎訳、柳谷武夫編輯『イエズス会日本年報』下、一九六～一九九頁。

(74) Schüttte, Monumenta Historica Japoniae, I, pp. 200–209.

(75) 松田・川崎訳、前掲書、11、一九七九年、九八頁。

(76) Schüttte, Monumenta Historica Japoniae, I, p. 209.

(77) 原語（翻刻本）は caza de aprovação.

(78) Fróis, op. cit., IV, pp. 275. 松田・川崎訳、前掲書、11、四四頁。

(79) Fróis, op. cit., IV, pp. 277. 松田・川崎訳、同右、11、四六頁。

(80) Fróis, op. cit., IV, pp. 277. 松田・川崎訳、同右、11、四七頁。

(81) Fróis, op. cit., IV, pp. 279. 松田・川崎訳、同右、11、四九頁。

(82) Fróis, op. cit., IV, pp. 279. 松田・川崎訳、同右、11、四九・五〇頁。

(83) Fróis, op. cit., IV, pp. 280. 松田・川崎訳、同右、11、五一頁。

(84) Fróis, op. cit., IV, pp. 312, 313. 松田・川崎訳、同右、8、二〇四頁。

(85) Fróis, op. cit., IV, pp. 315, 316. 松田・川崎訳、同右、8、二〇九・二一〇頁。

(86) Schüttte, Monumenta Historica Japoniae, I, pp. 209, 1242, 1243, 1288, 1289.

(87) Jap. Sin. 11–I, ff. 84, 84v., 86.

(88) Jap. Sin. 11–I, f. 121, 121v.

付記

五野井隆史「豊後府内の教会領域について――絵図、文献史料と考古学資料に基づく府内教会の諸施設とその変遷――」には、戦国時代後期の府内の町を描いた絵図である「府内古図」（江戸時代初期作成）、教会史料の記述、および近年の発掘調査の成果に拠って、一五八四年当時の府内イエズス会教会諸施設の位置関係を推測した図面が示されている。そこにはコレジオも記されている。（『東京大学史料編纂所研究紀要』一四号、二〇〇四年三月、四五・四六頁）。